

第5章 古墳と出土遺物の分析

第1節 土器

正直古墳群出土土器の位置付けを検討する。正直 35 号墳の壺、21 号墳の長胴化した壺、21・27・11・13・15 号墳の中型壺、27 号墳墳丘外の壺について順次類例を見ていく。そして、当該地域における土器変遷の概要を示し、各古墳の位置付けを明らかにしていく。

(1) 正直 35 号墳の壺形土器 (第 162 図)

正直 35 号墳からは2つの底部穿孔壺が出土している。いずれも墳頂部に据え置かれたものと考えられる。

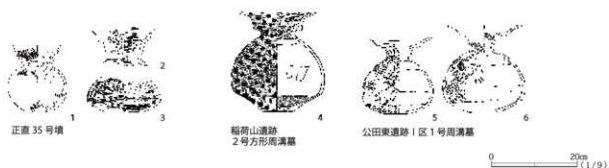
第 162 図 1 は単純口縁の底部穿孔壺で、器壁は薄く、丁寧に仕上げられる点が特徴的である。2・3 は、体部の資料及び胎土・色調から同一個体と考えられる頸部・口縁部の資料である。その最大の特徴は、体部最大径が底部に近い位置にあることである。かなり特徴的な形態であるが、類例と呼べる土器はこれまで知られていない。胴部最大径が底部近くにある特徴について、敢えて類例を挙げると、栃木県真岡市稲荷山古墳 (4)、群馬県前橋市公田東遺跡 1 区 1 号周溝 (5・6) などがある。いずれも有段口縁という点では共通するが、口縁部を含めた全体を比較すると、類似しているとは言い難い。1・2 いずれの土器も、前期でも後葉までは降らないものと考えられる¹⁾。

(2) 正直 21 号墳の壺形土器 (第 163・164 図)

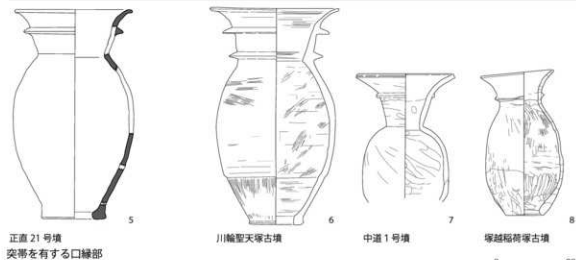
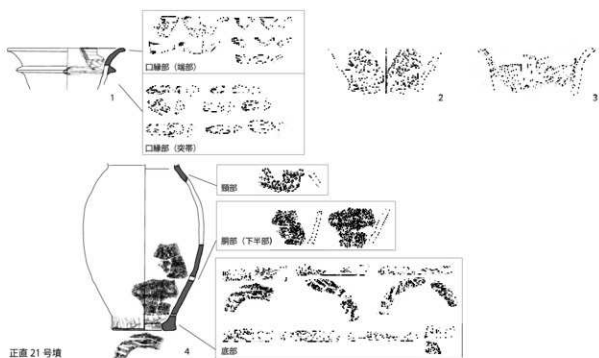
正直 21 号墳からは、古墳に伴う壺の破片資料が各トレンチから出土している。口縁部の特徴から、口縁部は外方に大きく広がりその下方に突帯を貼り付けるもの (第 163 図 1)、口縁部外面に粘土を貼り付けているもの (2)、単口縁の資料 (3) という3つの類型に分けられる。

口縁部に比べると胴部にバリエーションは見られない。また底部は、当初から底部を開いた状態で製作した開口底部である。胴下半部の資料も出土しているが、球胴ではなく長胴を呈するものと考えられる (4)。同様の特徴を有する類例は、神奈川県逗子市・葉山町の全長 90m の前方後円墳・長柄桜山 1 号墳、茨城県坂東市の全長 56m の前方後円墳・上出島 2 号墳、福島県いわき市の全長 112m の前方後円墳・玉山古墳などに見られる。

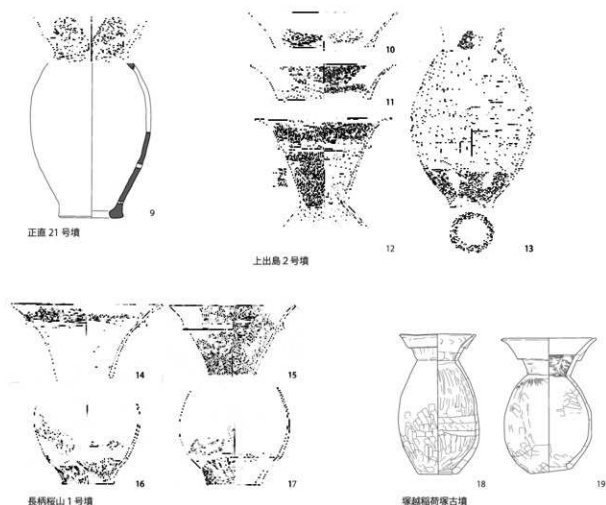
胴部については不明瞭であるため、それぞれの特徴的な口縁部について、類例を見ていく。突帯を有する口縁部としては、埼玉県美里町川輪聖天塚古墳がある (第 163 図 6)。同墳は長坂聖天塚古墳に後続するとされる円墳で直径は 38m を測り、埋葬施設は粘土槨と推定されている。墳丘上には、口縁部及び頸部に突帯を持つ形態と、突帯を持たない形態の2種類の壺形埴輪が樹立されている。いずれも胴部が長胴化した形態を呈している。埼玉県内の類例を集成した大谷徹氏によると、形態的特徴から中期初頭に位置付けられるとする (大谷 1998・2020)。直径 25m の円墳である埼玉県美里町の中道 1 号墳からも、



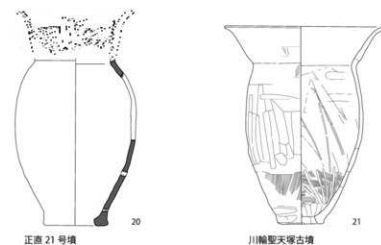
第162図 正直35号墳出土壺形土器の類例



第 163 図 正直 21 号墳壺形土器の類例 (1)



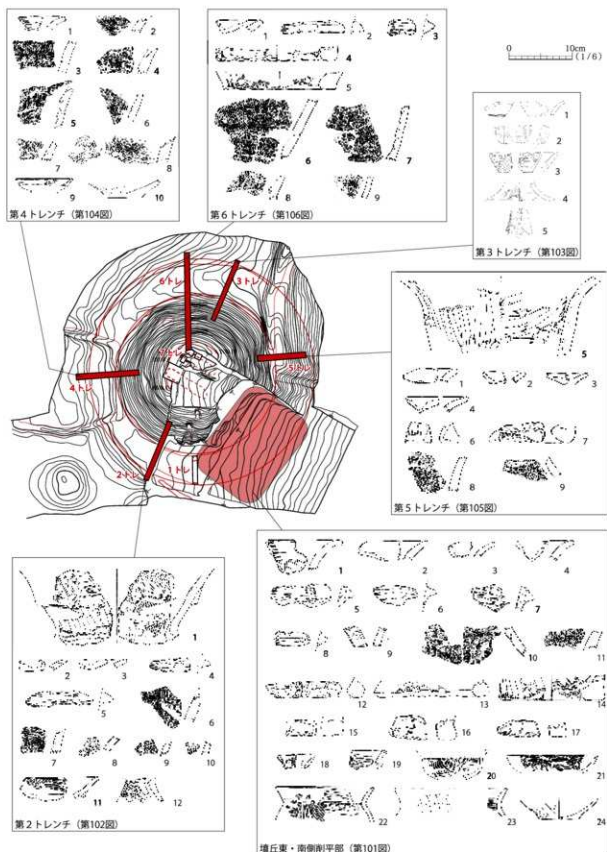
貼り付けによる複合口縁



外反する単純口縁

第 164 図 正直 21 号墳壺形土器の類例 (2)

0 20cm
(1/10)



第165図 正直21号墳遺物出土概要

口縁部が大きく外上方に開き、外面中位に断面三角形の突帯を巡らす長胴の壺形埴輪が出土している(7)。また、埼玉県寄居町塚越稲荷塚古墳は30mほどの方墳と考えられ、出土した壺はくびれに近い位置に突帯を施している(8)。明瞭な突帯の類似性などから、川輪型天塚古墳と同時期のものである可能性が高い。

第164図9は、口縁部外面に粘土紐を貼り付けるもので、段部内外面は屈曲をほとんど持たず、段部は粘土紐を貼り付けて断面三角形に成形している。細部において違いは多いものの、段部がほぼ屈曲を持たないことや粘土紐の貼り付けで段部を作出している点からすれば、上出島2号墳(10~13)や長柄桜山1号墳(14・15)、塚越稲荷塚古墳(18・19)の出土遺物に類例がある。東関東の壺形埴輪を検討した田中裕氏によれば、上出島2号墳は副葬品から前期後葉とされる(田中2005)。

同図20は、外反する単純口縁の壺である。類例は少なく、川輪型天塚古墳(21)などに散見される。

これらの類例は、概ね前期後葉~中期初頭に位置付けられている。正直21号墳の壺も同様の時期と考えられる。なお、これらの壺は、各トレンチから出土しており(第165図)、墳頂部に据えられたものと推察される。

(3) 正直古墳群の中型壺形土器(第166図)

正直古墳群からは、中型の壺がいくつか出土している。いずれも古墳の時期を考えるうえで重要なものとなるため、県内の類例を見ていく。

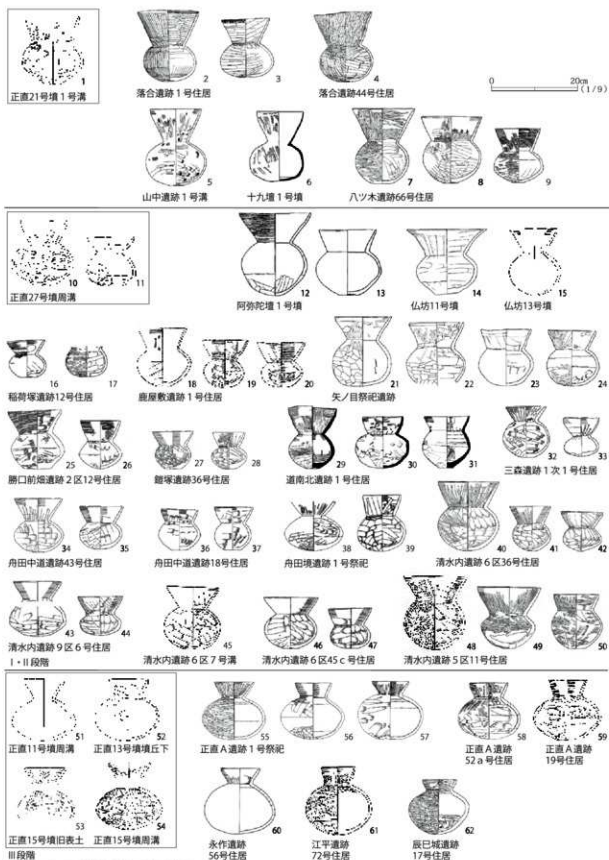
1. 正直21号墳

正直21号墳に隣接する1号溝から出土した壺(第166図1)は、古墳周溝からの出土ではないものの、古墳築造時期と近いものと考えられる。前述したように、21号墳の築造年代は前期後葉~中期初頭と考えられる。該期の類例としては、小野町落合遺跡1号住居・44号住居、新地町山中遺跡1号溝、喜多方市十九塚1号墳、須賀川市八ツ木遺跡66号住居出土遺物がある。この時期の特徴としては口縁部が大きく作られることやヘラミガキなどで丁寧に仕上げられることなどがある。そうした中、21号墳と形態的特徴を等しくするのが、八ツ木遺跡の9で、小さく作られる底部から張り出すような体部を呈し、口縁部が直線的に立ち上がる。

2. 正直27号墳

正直27号墳の周溝から出土した壺(第166図10・11)は、中期中葉と考えられる。この時期の資料としては、古墳では、郡山市阿弥陀壇1号墳、須賀川市仏坊11・13号墳などがある。集落遺跡では、会津盆地の会津坂下町稲荷塚遺跡12号住居、太平洋沿岸部の浪江町鹿屋敷遺跡1号住居がある。阿武隈川流域の福島盆地では、国見町矢ノ目祭祀遺跡、福島市勝口前畑遺跡2区12号住居・鍬塚遺跡36号住居が挙げられる。正直古墳群がある郡山市では、清水内遺跡5区11号・6区36号・6区45c号・9区6号住居、6区7号溝などが同時期の遺構として知られている。阿武隈川上流域の白河市では、白河市道南北遺跡1号住居、三森遺跡1次1号住居、舟田中道遺跡43号・18号住居、舟田境遺跡1号祭祀がある。

型式学的変化の方向性として、口縁部の割合が大きいものから小さいものへの変化が想定される。正直27号墳の10・11は口縁部が比較的短く、新しい様相と考えられる。ただ、阿弥陀壇1号墳(12・13)



第166図 正直古墳群出土壺形土器の類例

や道南北遺跡(29・30)のように、口縁部が長いものと短いものが共伴する事例がある点は注意を要する。

3. 正直 11・13・15 号墳

正直古墳群の中でも、支群Hの古墳は5世紀後半の時期が想定される。正直 11 号墳周溝(第 166 図 51)・13 号墳墳丘下(52)・15 号墳旧表土(53)・15 号墳周溝(54)が該当する。その特徴は、口縁部が体部に比較して小さい点・頸部がすぼまる点・体部が中位で外側に張り出す点などである。同時期の資料は阿武隈川流域に豊富で、郡山市域では正直A遺跡 1 号祭祀(55~57)・同 52a 号住居(58)・19 号住居(59)、永作遺跡 56 号住居(60)などに類例がある。また、玉川村江平遺跡 72 号住居(61)・辰巳城遺跡 17 号住居(62)からも同じ特徴の壺が出土している。

ところで、正直 11 号墳周溝出土の壺(51)は、他の資料に比べ口縁部の割合が大きい点を指摘できる。これは、古い様相とすることができる。組成の特徴については後述するが、11 号墳出土の碗坏類は平底のものが多数を占めるなど、いくつかの形式で古い様相を指摘することが可能である。

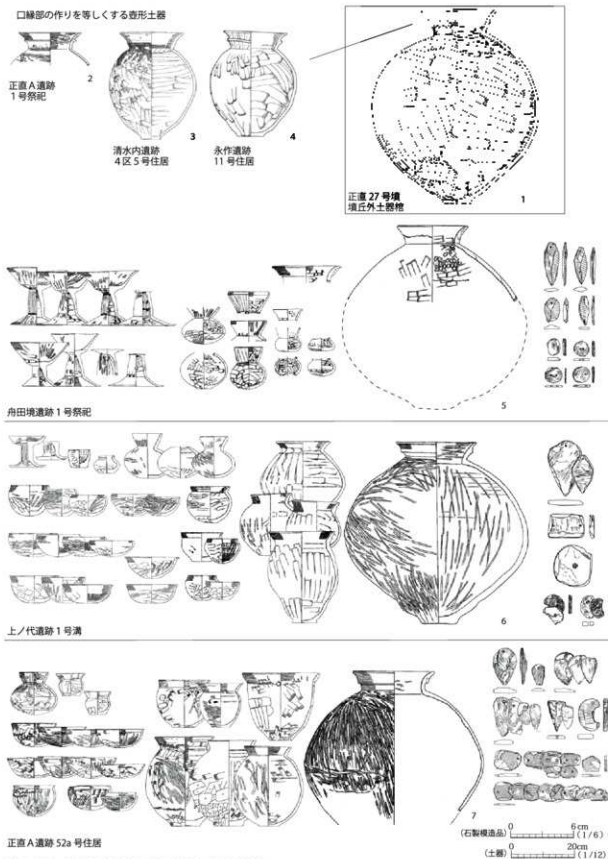
(4) 正直 27 号墳墳丘外の大形壺形土器(第 167 図)

正直 27 号墳では、周溝の外側で周溝と接するように土器棺が検出された。土器棺に用いられた土器(第 167 図 1)は器高 61.3 cm・体部最大径 53.0 cmを測る大型の壺である。球形に近い体部と複合口縁状の口縁部が特徴的である。口縁部は頸部から外方向へ伸び、中位で内側からさらに外上方へ伸びており、外側に段が形成される。同様の特徴を持つ土器に、清水内遺跡 4 区 5 号住居の 3 や永作遺跡 11 号住居の 4 がある。また、正直A遺跡 1 号祭祀の 2 は突帯状に粘土が貼り付けられているが、同じように内側から粘土を積み上げている。これらの土器は 5 世紀中葉~後葉に位置付けられる。

この壺の最大の特徴は、大型で体部が球形を呈することである。こうした特徴の壺は、県内でも阿武隈川流域の遺跡から見つかっている。白河市舟田境遺跡 1 号祭祀では、高坏・小型丸底壺とともに大型壺(5)が出土している。体部下半は欠失するが、複合口縁を呈する。共伴する石製模造品は両面に竅を持つ精巧なつくりの剣形などを含んでいる。須賀川市の上ノ代遺跡では、方形区画を構成する 1 号溝から大型壺(6)が出土している。複合口縁状に口縁部外面が厚く作られる。正直A遺跡 52 a 号住居は、祭祀の場に隣接する堅穴遺構で、石製模造品工房と、祭祀の道具を貯蔵する場を兼ねていたと想定される。大型壺(7)は底部付近が欠失するが全容をうかがうことができる。口縁部は貼り付けにより複合口縁を呈している。

土器組成や石製模造品の特徴などから、舟田境遺跡 1 号祭祀→上ノ代遺跡 1 号溝→正直A遺跡 52 a 号住居という時間的位置付けで理解される。そうした中、舟田境遺跡 1 号祭祀の 5 は肩部の張りが弱く、体部下半に最大径があると想定される。そのため、壺の形態としては、正直 27 号墳土器棺の壺は上ノ代遺跡や正直A遺跡例に近い。類例は非常に少ないが、5 世紀中葉~後葉の可能性が考えられる。

ところで、胴部が張り出し、口縁部が折り返し状を呈するなど形態の特徴が共通するこれらの大型壺は、個体としての特徴のみならず、石製模造品・供膳具を伴うなど、共通する部分が多い。そしてそれらの出土から、石製模造品を用いた祭祀と密接な関わりを持つことが首肯される。つまり非日常の祭祀性の性格が強い遺物と言うことが可能で、その点では、正直 27 号墳墳丘外の土器棺も共通性を持つも



のと言える。

(5) 中期の土器群

これまで、特徴的な壺を中心にそれぞれの類例を概観し、年代的な位置に触れた。ここでは、古墳時代中期を中心とする土器の変遷を概観し、具体的な変遷観を示す。

1. 福島県における土器変遷 (第168図)

東北地方南部における古墳時代土器研究の嚆矢となるのは氏家典氏の検討で、5世紀に該当する土器群として「南小泉式」・「引田式」が設定された(氏家1957)。その後、藤澤敦氏によりその内容が具体的に示され、明確な変遷基準が示された(藤澤1992)。特に資料の豊富な福島県では、辻秀人氏・柳沼賢治氏・青山博樹氏らにより検討が行われ、研究の進展をみた(辻1989、柳沼1999、青山1999)。

佐久間は、それまでの研究を尊重しながらも、新たな枠組みで土器群を捉える試みを行った。それは、様式的な側面を重視するもので、屈折脚高坏・小型壺・碗坏などの特徴的な器種の消長を編年の軸に据えている。その結果、福島県における613遺構の共伴例から土器群を再構築し、Ⅰ～Ⅳの4つの段階を設定した。そして、器種の消長を重視する視点から東北地方南部と関東地方北部との並行関係に言及し、両地域域の土師器が共通して変化する様相の一端を示した。さらに列島の視点で、九州、中四国、近畿、東海なども概観し、共通する点について述べた(佐久間2000・2012・2019)。

佐久間が重視するのは、土器群を最大公約数的に捉える視点である。組成としてのまとまりの整理から、各段階の変遷模式図を示した。5世紀の土器群としてⅠ～Ⅳ段階を設定し、その前段階を0段階としている。

0段階は、高坏A類と高坏B類が出土する段階で、一部に小型器台・小型丸底壺などの器種が残存する構成のもの。高坏B類は、脚部が細身で脚部の上半部が中実になる形態のものも多い。

Ⅰ段階は、「高坏B類+壺A類+壺B1類」を基本的な構成要素とする。

Ⅱ段階は、「高坏B類+壺A類+壺B1類+碗坏類」という構成要素となる。Ⅰ段階と異なるのは碗坏類を含む点にある。ただ、碗坏類の出土量は遺構毎にばらつきが見られる。高坏C類はこの段階に一定量出土する。

Ⅲ段階は、「高坏B類+碗坏類」という構成要素となる。前段階までに見られた高坏B類と壺A類が多量に出土する状況は一変し、供膳形態はほぼ碗坏類で占められる。高坏と壺B類は減少し、大型の甕B類が出現するとともに、住居のほとんどに竈が設置される。壺B2類と高坏C類の残存するⅢa段階と、甕B類の出現するⅢb段階とに細分することが可能である。

Ⅳ段階は、「高坏E類+碗坏類」という構成要素となる。高坏B類は見られなくなり、短脚で中実の高坏E類が主体となる。また、碗坏類ではそれまでのA類・B類に加え、須恵器模倣坏と考えられるC類が含まれる。

2. 正直古墳群出土土器の変遷 (第169・170図)

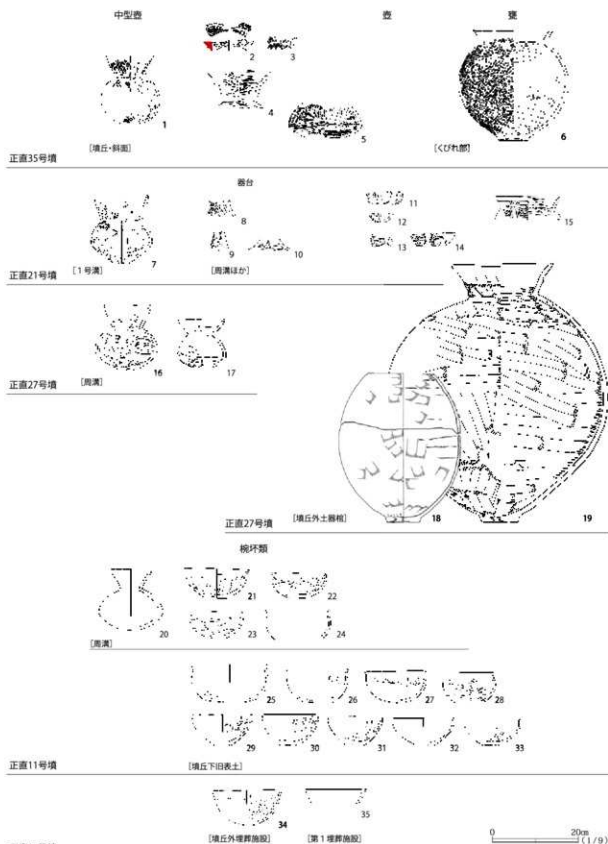
それでは、正直古墳群の各古墳から出土した土器を見ていく。古墳群内で最も古い段階に位置付けられるのが正直35号墳である。墳丘及び斜面から単口縁で底部が穿孔された壺(第169図1)や特異な形態の壺(4・5)が出土している。くびれ部出土の甕(6)は口唇部外面が平坦に面取りされている。

	高坏A類	高坏B類	小型器台	小型丸底 器・鉢	中型器	鉢類	甗A類	甗	甗	須恵器
0段階										(TG232)
Ⅰ段階				甗A類 	甗B 1類 					TK73
Ⅱ段階			高坏C類 			高坏類 				TK216
Ⅲa段階					甗B 2類 					TK208
Ⅲb段階								甗B類 		TK23
Ⅳ段階		高坏E類 								TK47

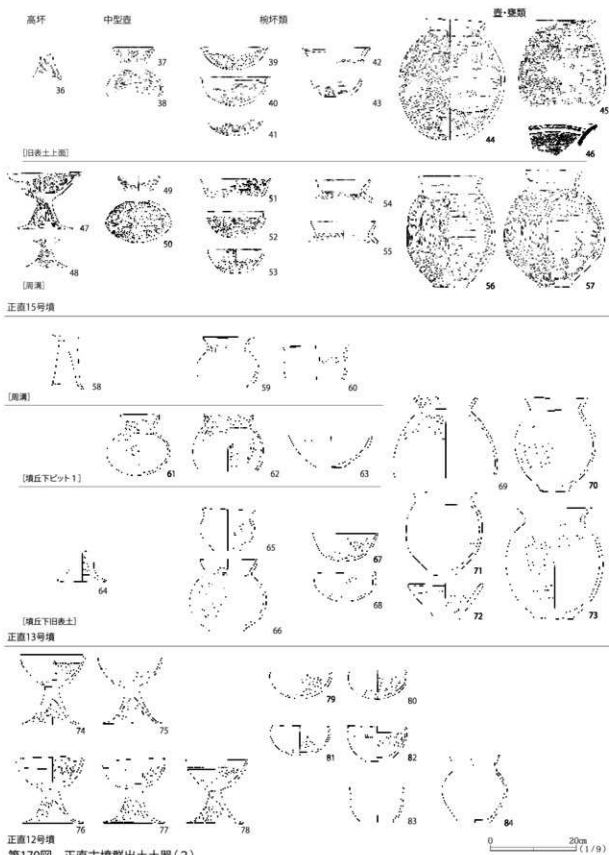
供膳形態の主体

小・中型1/16 大型1/19

第168図 福島県における土器変遷図



第169図 正直古墳群出土土器(1)



後続するのが正直 21 号墳である。近接する時期の 1 号溝から壺(7)が出土する。埴輪として樹立されていた開口底部の壺以外では、小型器台(8~10)や外面に縦位の棒状浮文が見られる壺口縁部(11~13)がある。これらは、周溝などからの出土である。いずれも前期に位置付けられ、積極的に評価すれば、古墳築造時期は前期末に近い時期と考えられる。

27 号墳からは、周溝及び周溝外から土器が出土した(16~19)。このうち周溝外の土器棺の一部を構成する甕(18)は、体部がラグビーボール状に長胴化している。

11 号墳では、周溝と墳丘下旧表土から土器が出土している。周溝からは、壺(20)とともに口縁部が屈曲する椀坏 A 類(21~24)が出土し、墳丘下旧表土からは椀坏 A 類(25~28)とともに口縁部が内湾ぎみに立ち上がる椀坏 B 類(29~33)が出土している。周溝出土の椀坏類はいずれも平底あるいは平底風の丸底を呈し、両者に明確な時期差は見られない。なお、椀坏類では平底が古相を示し丸底が新しく位置付けられる。そのため、11 号墳は、12・13・15 号墳と比べ、わずかに古いことが指摘できる。これは前述したように、壺 20 が、壺 37・38、壺 49・50、壺 61 に比べ古い特徴を持つことと整合的である。

正直 30 号墳では、墳丘外埋葬施設及び第 1 埋葬施設から椀坏類(34・35)が出土している。いずれも半球形に近い体部と考えられる。

正直 15 号墳からは旧表土上面及び周溝から土器が出土している。両者で共通するのは、いずれも高坏・中型壺・椀坏類・甕が出土していることである。高坏(第 170 図 36・47・48)はいずれも脚部がハの字状に開く形態である。またいずれの中型壺(37・38、49・50)も特徴を等しくする。椀坏類は周溝出土の 52 が平底風となる。

正直 13 号墳では、周溝、墳丘下ビット 1、墳丘下旧表土から土器が出土している。特徴としては、椀坏類の供膳具が少なく、壺あるいは鉢(59・62・65・66)が目立つ。甕(71)は体部中位が直線的となり、15 号墳の 56 と近似する。なお、58 は完成形であるが、用途が不明で類例は知り得ない。

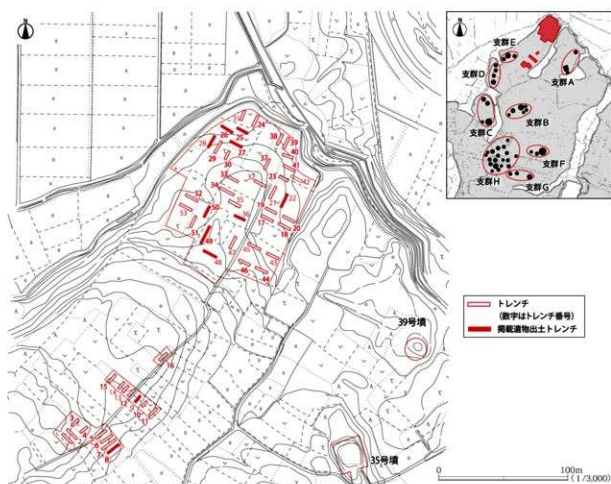
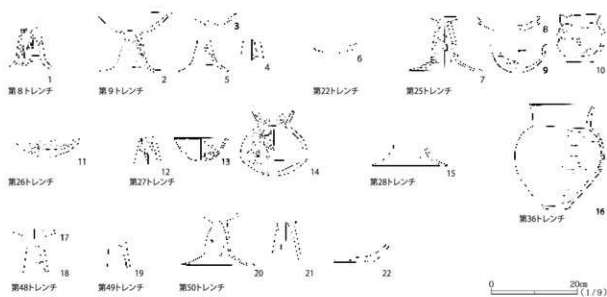
正直 12 号墳からは、特徴的な高坏(74~78)が出土している。口縁部外面に段を形成しており、須恵器の影響と思われる。Ⅳ段階の高坏は短脚で中実となり、中期を代表する中空の屈折脚とは明確に異なる。12 号墳の脚部は脚部の上部がやや中実になることから、過渡的な様相と捉えられる。しかし、椀坏類は口縁部の作りが小さく平底風の 82 があり、さらに模倣坏が見られないことなどから、Ⅳ段階と考えることは難しい。

3. 分布調査北側トレンチ出土土器(第 171 図)

分布調査北側のトレンチからは、同時期の土器が多数出土している。その特徴は高坏が多い点である。この点は、Ⅰ・Ⅱ段階の特徴と言える。さらに第 8・25・50 トレンチから、脚部に穿孔が施される高坏(第 171 図 1・7・20)が出土している点も重要である。高坏自体はⅢ段階まで残存するものの、脚部に穿孔される高坏が出土するのはⅠ・Ⅱ段階に限定される。

こうした高坏は、郡山市清水内遺跡 2 区河川、4 区 1 号河川、5 区 2 a・11・13 号住居、6 区 20・24・31・34・45 号住居、2・7 号溝、9 区 8・10・19 号住居で出土している。また、国見町矢ノ目遺跡、福島市勝口前畑遺跡 2 次 5・23 号住居・128 号土坑、同 10 次 59 号住居、福島市鏡塚遺跡 36 号住居、白河市道南北遺跡 1 号住居、三森遺跡 4・5・36 号住居・大型周溝、同Ⅱ区 2 号住居などでも出土している。

分布調査地点では堅穴建物も多数確認されており、5 世紀前半の集落が広がっていると考えられる。



第171図 正直B遺跡分布調査北側トレンチ出土土器

註

- 1) 正直 35 号墳の二重口縁壺については、各地の研究者より類別について情報の提供を頂いた。古屋紀之氏からは関東地方における底部穿孔壺の変遷を示されるとともに、大安場古墳の底部穿孔壺にも触れられ、東北地方のものは関東地方とは異なる様相である点についてご教示を頂いた（2024 年 4 月 4 日）。

引用・参考文献

- 青山博樹 1998 「土器①東北南部」『シンポジウム前期古墳から中期古墳へ 発表要旨資料』 東北・関東 前方後円墳研究会 7-16 頁
- 青山博樹 1999 「古墳時代中～後期の土器編年」『福島考古』第 40 号 45-69 頁
- 青山博樹 2004 「底部穿孔の思想」『日本考古学』第 18 号 日本考古学協会 73-92 頁
- 氏家和典 1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第 14 輯 1-14 頁
- 大谷 徹 1998 「埼玉県 前期古墳から中期古墳へ」『シンポジウム前期古墳から中期古墳へ 発表要旨資料』 東北・関東前方後円墳研究会 151-158 頁
- 大谷 徹 2020 「埼玉県における埴輪の受容と展開」『研究紀要』第 34 号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 27-38 頁
- 佐久間正明 2000 「福島県における五世紀代の土器変遷」『法政考古学』第 26 集 27-59 頁
- 佐久間正明 2012 「福島県における五世紀代の土器変遷（2）」『東生』第 1 号 111-133 頁
- 佐久間正明 2019 「5 世紀における土師器の並行関係について—東西における器種組成の共通性を中心に—」『古代』第 144 号 早稲田大学考古学会 59-80 頁
- 田中 裕 2003 「五領式から和泉式への転換と中期古墳の成立」『古墳時代中期の諸様相』 帝京大学山梨文化財研究所 1-14 頁
- 田中 裕 2005 「壺形埴輪と東関東の前期古墳」『千葉県文化財センター研究紀要』 139-161 頁
- 辻 秀人 1989 「東北古墳時代の画期について（その 1）」『福島県立博物館紀要』第 3 号 1-19 頁
- 西川修一 1999 「古墳前・中期の境界の土器様相をめぐる諸問題」『東国土器研究』第 5 号 269-291 頁
- 西川修一 2011 「土師器の編年 ⑤関東」『古墳時代の考古学 1』 同成社 109-122 頁
- 日高慎・田中裕 1996 「上出島 2 号墳出土遺物の再検討」『岩井市の遺跡Ⅱ』 岩井市史編さん委員会 114-138 頁
- 日高 慎 1998 「茨城県 前期古墳から中期古墳へ」『シンポジウム前期古墳から中期古墳へ 発表要旨資料』 東北・関東前方後円墳研究会 105-122 頁
- 藤澤 教 1992 「引田式再論」『歴史』第 79 号 東北史学会 86-86 頁
- 柳沼賢治 1999 「福島県における 5 世紀土器とその前後」『東国土器研究』第 5 号 21-42 頁

報告書

- 岩井市教育委員会 1976 『上出島古墳群』
- いわき市教育委員会 2009 『県指定史跡 玉山古墳』
- 逗子市教育委員会・葉山町教育委員会 2012 『国指定史跡長柄松山古墳群第 1 号墳発掘調査報告書』
- 栃木県小川町教育委員会 1997 『那須八幡塚古墳』
- 寄居町遺跡調査会 2010 『東坪場地遺跡（第 7 次）—塚越稲荷塚古墳—』 寄居町遺跡調査会報告第 33 集

第2節 石製模造品

(1) 正直古墳群出土石製模造品の概要 (第172～174図)

正直古墳群からは多量の石製模造品が出土しているが、個別の検討を行う前に先ずその概要を把握し、組成の面での特徴を考えたい。

支群Bの正直27号墳では、南箱式石棺から刀子形6点・斧形1点・剣形19点・有孔円板24点が出土している(第172図)。北箱式石棺西側区画からは剣形18点・有孔円板9点・白玉666点が、北箱式石棺東側区画からは剣形23点・有孔円板14点・白玉786点が出土している。支群Cの23号墳では、木炭塚から刀子形6点が出土している(第173図)。支群Dの30号墳では埋葬施設が2基確認され、第1埋葬施設からは刀子形4点・剣形1点・有孔円板4点・白玉5点が出土している。墳丘外埋葬施設からは剣形3点と有孔円板6点が出土し、周溝から剣形2点・有孔円板1点が出土した。支群Hの9号墳からは、斧形2点・鎌形1点が出土している。同じ支群Hでは、13号墳で周溝などから剣形1点・有孔円板2点・勾玉1点が出土した。また、15号墳で周溝と旧表土上より有孔円板がそれぞれ4点出土しており、隣接する1号溝から出土した剣形1点は、箱式石棺の破壊に伴い流出したものである可能性が高い。

正直古墳群に関する遺物のうち、石製模造品の記述は全国的な集成及び分析を行った論考の中でも登場する。その初期のものには、相山林離氏が古墳及び祭祀遺跡出土の石製模造品を対象とした研究があり(相山1972)、その集成表に9号墳と23号墳についての記載が見られる。

白石太一郎氏が行った石製模造品の考察は、現在においても基礎とされる分析である(白石1985)。その付表には9号墳と23号墳についての記載があり、9号墳については「中期中葉から後半」にかけての時期とされる「第3期」と明示されている。

(2) 刀子形石製模造品

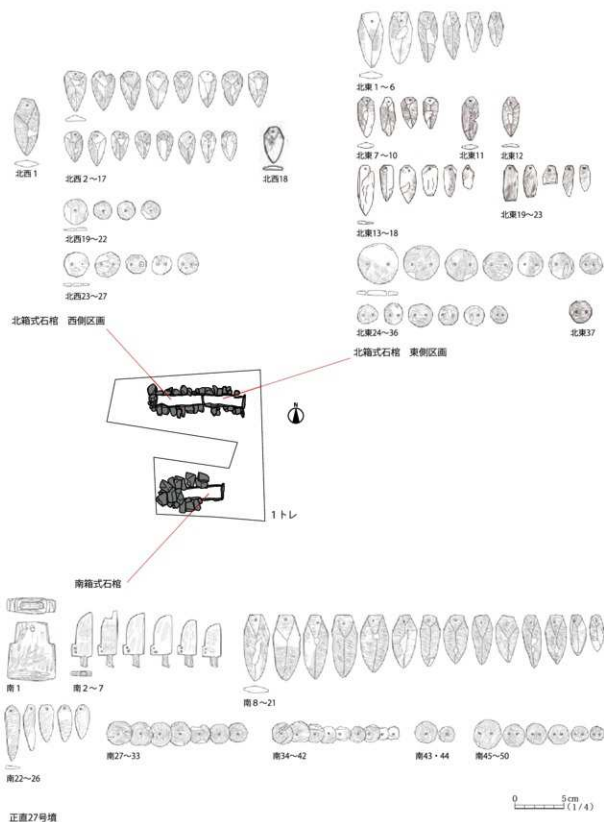
1. 刀子形石製模造品形態変化の方向性 (第175図)

刀子形は、正直27号墳南箱式石棺のものが定型的な形態で、正直古墳群出土のものでは最も古いものと考えられる。把部先端に挟み込まれる見られず、背側に向かって斜めに伸びる。27号墳の中でも小型の2点は把部の反りが弱くなっているが、これは小型化と関連があるものと思われる。

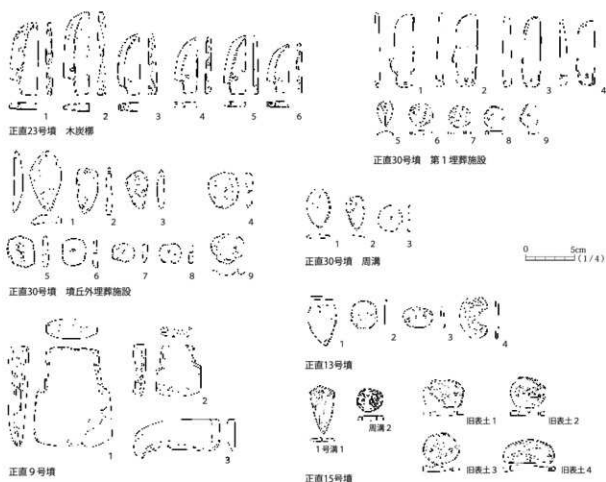
正直23号墳のものは大型扁平化し、背側で鞘部と把部の区別が消失する。大型の第175図3は線刻によりかろうじて方形突出部の表現が残存する。サイズが小さくなるにつれ、穿孔が刃側から中央部へ移動し、方形突出部の表現も完全に消失する。

正直30号墳の刀子形は、方形突出部の表現・鞘部と把部の区別がかろうじて残存する。しかし、穿孔位置は本来の方形突出部から把部へと移動している。このうち175図6は、方形突出部の表現が非常に弱くなる。

正直古墳群出土の刀子形は、27号墳のものに比べ、23号墳と30号墳はいずれも大型扁平化し、刀子形各部の省略化が顕著で、形態の変容が著しい点を指摘できる。一方、23号墳と30号墳では形態変化の方向性が異なり、23号墳は方形突出部の表現が1点を除き消失し、背側における鞘部と把部の区別も



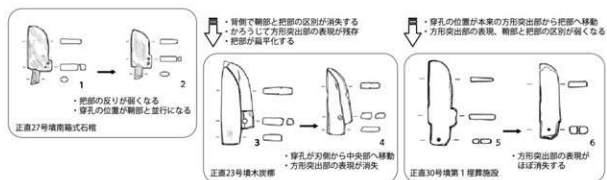
第172図 正直古墳群の石製模造品（1）



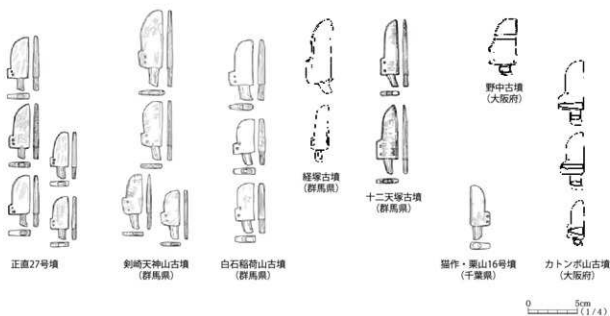
第173図 正直古墳群の石製模造品（2）

古墳名	支群	出土位置		出土石製模造品								
		埋葬施設	墳丘/周溝	刀子	斧	鏃	剣	有孔板	白玉	碧玉	勾玉	
27号墳	支群B	南箱式石棺		6	1		19	24				
		北箱式石棺西区画					18	9	783			ガラス玉3
		北箱式石棺東区画					23	14	673			ガラス玉7
		土葬棺							61			
23号墳	支群C	木炭櫓		6					10			琥珀玉2
30号墳	支群D	第1埋葬施設		4			1	4	7			
		第2埋葬施設								1		ガラス玉27 瑪瑙勾玉1
		墳丘外埋葬施設					3	6				
		周溝					2	1				
13号墳	支群H	周溝ほか					1	2			1	
15号墳	支群H	1号溝					1					
		周溝						4				
		旧表土上						4				
9号墳	支群H				2	1						

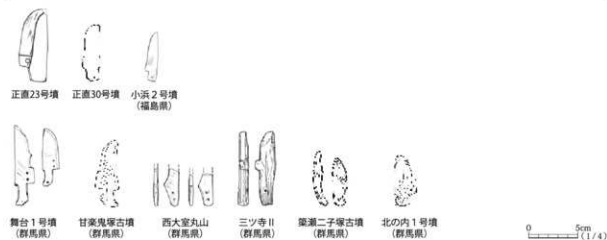
第174図 正直古墳群出土石製模造品一覧



第175図 刀子形における形態変化の方向性



第176図 突出部二孔類型の刀子形



第177図 特徴的な刀子形

完全になくなるが、穿孔は鞘部にある。これに対し30号墳は、方形突出部・背側における鞘部と把部の区別が残存するものの、穿孔の位置が本来の方形突出部から把部へと大きく移動している。そのため、「23号墳→30号墳」あるいは「30号墳→23号墳」という直接的な形態変化の方向性は考えられない。刀子形出土古墳の位置付けは、27号墳が最も古く、23号墳と30号墳が相対的に新しいと把握している。

石製模造品の編年と地域性について言及している河野一隆氏は福島県の状況にも触れ、「最古のものは福島県正直27号墳だが、総じて第IV期（5世紀後半）のものが多い」とされている（河野1999・2002・2003）。さらに「正直古墳群は第23号墳、第30号墳と継起的に石製模造品の儀礼が展開する」としており、石製模造品については、「大型扁平な作りで、脊側の把部の彫り削り込みが小さい特徴がある」と述べている。

田中新史氏は常総を中心とした古墳出土の滑石製模造品について分析を行い、23号墳の石製模造品について「既にⅡ期から存在する鞘や把を附装しない抜身の鉄製刀子を模したものの関わりが深いと捉えたい」と触れられている（田中2002）。また引用・参考文献中では、「27号墳はTK216期よりも遡り、23号墳も鞘・把を表現しない鉄刀子を模したものとして新しくはならず、最も新しい30号墳例がON46期に留まるか地域の変容による残存型なのかが問題となる」と述べている。

2. 正直27号墳刀子形の類例（第176図）

正直27号墳の刀子形は、方形突出部に2孔が穿たれる定型的なもので類例は多い。その中でも、扁平で短い把部などの特徴を持つものでは、群馬県では高崎市剣崎天神山古墳・藤岡市白石稲荷山古墳・同十二天塚古墳・安中市経塚古墳出土例がある。千葉県では成田市猫作・栗山16号墳があり、また近畿地方中央部では、大阪府藤井寺市野中古墳や堺市カトンボ山古墳で出土例があるが、群馬県内の古墳出土例が形態的特徴を等しくする。いずれも5世紀前半であり、正直27号墳も同時期に比定される。

3. 5世紀後半～6世紀初頭における特徴的な形態（第177図）

前述したように、正直23・30号墳の刀子形は、定型的な形態のものから形骸化が進んでいると言える。ほぼ同じ時期、関東地方においても、刀子形の形態は変化するが、その変化の方向性は異なる。群馬県内では、総じて、省略化・大型化・扁平化、そして把部への穿孔位置の移動などが挙げられる。全く同じものは確認できないものの、同じ変化の方向性を辿ることが分かる。千葉県内では、5世紀末になると急速に減少し、同様の変化は見られない。

5世紀前半における地域を越えての共通性は、5世紀後半に確認することは難しく、石製模造品製作を取り巻く状況も大きく変化していることが読み取れる。

（3）斧形・鎌形石製模造品

斧形が出土した古墳は正直27号墳と9号墳で、鎌形は9号墳に限定される。この9号墳の石製模造品は『福島県史』6に掲載されているものである。27号墳の斧形は、袋部の整形も丁寧で、径5mmの貫通孔の他に径1.5mmの紐通し孔と思われる穿孔も見られる。表面の整形も丁寧で光沢がある。9号墳の斧形は、大小2種類のものが知られている。両者とも袋部の加工はなされず、穿孔も見られない。27号墳の斧形に比較すると全体的に丸みを帯び、鈍角的な印象すら受ける。鎌形は先端部に向かって湾曲する曲刃鎌で、図を見る限り着装部の表現も見られる。

9号墳の出土遺物は他に知られておらず、さらに斧形と鎌形の出土位置も確認できない。そのため多くの情報を得ることは不可能であるが、斧形の模造品を見る限り、27号墳が9号墳に先行することは首肯される。なお斧形については、第3節で詳述する。

(4) 剣形石製模造品 (第178～180図)

剣形は、正直27号墳の2基の箱式石棺・3つの埋葬区画、30号墳第1埋葬施設、15号墳1号溝、30号墳墳丘外埋葬施設などから出土している。

剣形の分析を行った篠原祐一氏や鈴木素行氏によれば、剣形の形態変化の方向は、平面形態が「明確な関の表現があるもの→関の表現はないが茎は突出部として表現されたもの→茎の表現がなく平坦なもの」とされ、断面形態には「両面に鎧→片面に鎧→鎧なし」という変化が示されている(篠原1997、鈴木1997)。そして、平面形態が優先され、断面形態はそれに次ぐ二次的な属性としている。

分類は平面形態と断面形態の特徴から類型を設定した(第178図)。平面形態は、茎部に相当する部分を基部と呼称し、基部の特徴を中心に分類した。A(基部突出:基部が明瞭に加工されるもの)・B(基部台形:基部が逆台形を呈すもの)・C(基部弯曲:基部が弯曲するもの)・D(不整形:全体が不整形な形態のもの)とする。断面形態は、2つの属性で分類した。上位の断面形態1は加工する面により分類するもので、1(両面加工:両面を加工し菱形を呈すもの)・2(片面加工:片面を加工し三角形を呈すもの)・3(扁平:刃部を表現する加工がないもの)の3つに分ける。断面形態2の属性は、a(鎧形成:表面全体を加工し鎧を形成するもの)・b(側縁刃部:側縁部を加工し刃部を形成するもの)の2つに分ける。

こうした属性の組み合わせから、4をB1a類とするように、記号により形態を示す。なお型式的には、平面形態は「A→B→C→D」、断面形態1は「1→2→3」という形態変化が想定される。

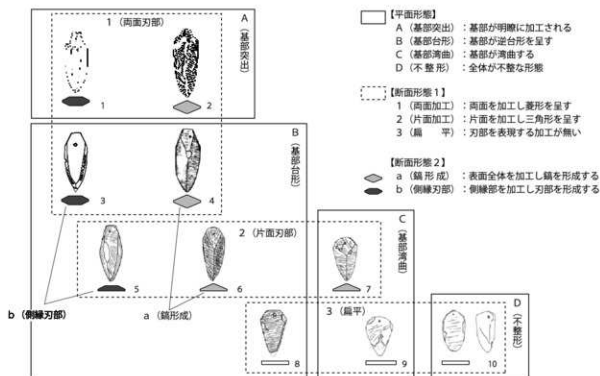
第179図は、各類の数量を示したものである。正直27号墳南箱式石棺と北箱式石棺東側区画では、B1a類+B2a類+B3類の組み合わせで共通するが、北箱式石棺西側区画ではC2a類が大多数を占める。正直30号墳第1埋葬施設の1点はC2a類に、正直15号墳1号溝と30号墳墳丘外埋葬施設の遺物はD3類である。

こうした剣形のあり方からは、27号墳の3つの箱式石棺から出土した剣形には、わずかに型式的な差が見られる。そして27号墳に後続するのが、30号墳第1埋葬施設で、15号墳1号溝が後続するという先後関係が導かれる。この「27号墳→30号墳→15号墳」という関係は、刀子形の検討でみた「27号墳→30号墳」という関係と合致する。

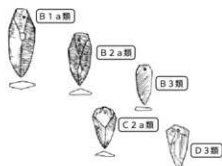
第180図は、参考として東北地方の祭祀遺跡・遺構を対象とし、土器の段階毎に剣形の断面形態の割合を示したものである。時期が古いものほど両面加工のものが多く、扁平なものが少ない。そして、時期が新しくなるにしたがい扁平なものが多くなることが分かる。

(5) 有孔円板 (第181図)

有孔円板は、正直27号墳南箱式石棺から24点、同北箱式石棺西側区画から9点、同北箱式石棺東側区画から14点、30号墳第1埋葬施設から4点、同墳丘外埋葬施設から6点、同周溝から1点、15号墳

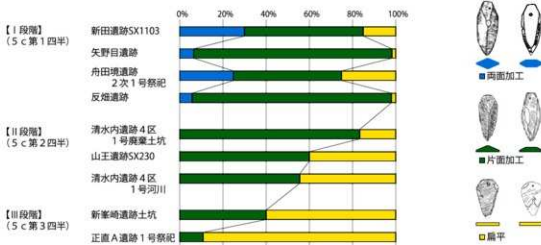


第178図 剣形分類図



	27号遺跡 第1層	27号遺跡 第2層	27号遺跡 第3層	30号遺跡 第1層	15号遺跡 第1層	30号遺跡 第2層
B1a類	10	1	3			
B2a類	4	1	9			
B3類	5		11			
C2a類		16		1		
D3類					1	3

第179図 正直古墳群剣形出土一覧



第180図 東北地方の祭祀遺構における段階別剣形出土割合

周溝から4点、同旧表土上から4点、13号墳周溝で2点出土した。

有孔円板には、単孔と双孔の二者が見られる。その組み合わせを見ると、単孔と双孔の両方が出土したものは27号墳南箱式石棺、同北箱式石棺西側区画、36号墳墳丘外埋葬施設である。双孔のみの出土は、27号墳北箱式石棺東側区画、30号墳第1埋葬施設、15号墳周溝、同旧表土上である。30号墳の周溝では、単孔のみの出土である。

有孔円板の形態変化については、未だ明らかでない部分が多いものの、いくつかの指標をもとに形態変化の方向性を探ってみよう。その際、丁寧なものから粗放なものへという変化を想定するとともに、祖形に鏡を想定し整った円形と2孔の間隔が狭いものを古い要素とした。

第181図上は、縦軸に長幅比（最大幅／最大長×100）、横軸を厚さとしたグラフで、100に近いほど長さや幅が等しく、左ほど厚さが薄いことを示している。グラフの法量分布を見ると、正直27号墳は形態的によくまとまった分布と言え、円形で薄いという特徴を見ることができる。30号墳第1埋葬施設や13号墳になると、27号墳が分布する範囲から逸脱する個体が見られるようになる。その形態変化の方向は、比較的整った円形から形態が崩れ、厚みを増すという点である。そうした変化は、15号墳と30号墳墳丘外埋葬施設でさらに顕著なものとなり、グラフ上でも27号墳の分布から完全に逸脱することが分かる。この他、15号墳には明らかに長円形が欠損するため計測不能なものも存在し、そうした個体を考えると円形からの形態の崩れはさらに顕著なものと言える。

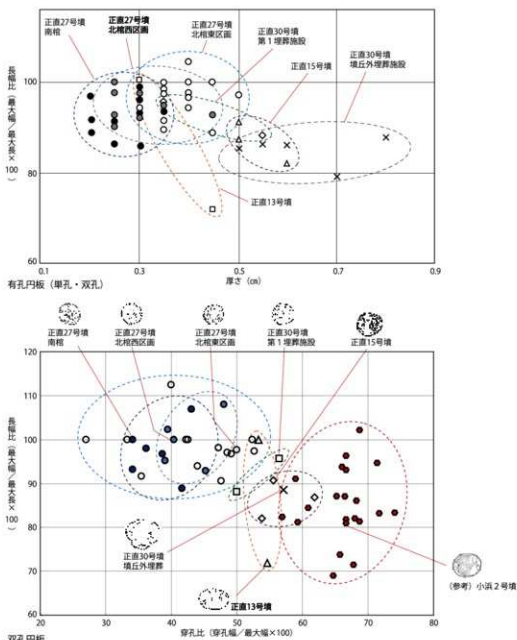
有孔円板の中でも、単孔・双孔の両者を併せて考えた場合、「27号墳→30号墳第1埋葬施設→15号墳→30号墳墳丘外埋葬施設」という方向で、円形から長円形へ形態が崩れ、厚みを増すという形態変化が生じていることが分かる。

では次に双孔円板に的を絞って分析を行ってみよう。第181図下は、縦軸が第181図上と同様に長幅比を示し、横軸は最大幅に対する穿孔幅の比率を数値化したものである。グラフの右側の数値ほど、2孔の間隔が広いことを表している。

これによると、正直27号墳の3つの埋葬施設にはややばらつきが認められるものの、穿孔比はほぼ50以下におさまリ、穿孔の間隔が最大幅の半分以下におさまることが分かる。そして30号墳第1埋葬施設・13号墳が27号墳のまとまりからわずかに離れ、15号墳及び30号墳墳丘外埋葬施設ではさらに分布から逸脱する。双孔円板に限って、その形態変化を考えた場合、「27号墳→30号第1埋葬施設→15号・30号墳墳丘外埋葬施設」という方向で、最大幅に対する2孔の間隔が狭いものから広いものへ変化していることが分かる。

以上、単孔・双孔の両者を併せて考えた場合と、双孔に限って考えた場合をまとめると、「27号墳→30号第1埋葬施設→15号墳・30号墳墳丘外埋葬施設」という形態変化が見られる。

こうした変化は時期差によると考えられ、1つの古墳群で形態変化の様子をうかがうことが確認できる点は重要である。一方、この点に関しては、古墳群内の傾向であり、他の古墳資料にそのまま当てはまるものではない点は注意を要する。この点に関しては清喜裕二氏の指摘がある。氏は正直古墳群における変化の方向性が古墳群内での分析により、一定の傾向をつかむことのできる事例であると認めうえて、「一方で、石製品として想定される変化の方向性を、実際の出土状況がいつも保証してくれるわけではない」とも指摘している（清喜2013）。傾聴すべき指摘である。



第181図 有孔円板法量分布図

所在地	古墳名	埋葬施設	石製模造品						
			刀子	斧	鏃	剣	有孔板	白玉	他
南相馬市	真野古墳群	49号墳	7	1	1			1	案1・鏃1
伊達郡国見町	塚野目古墳群	11号墳	7	3	3				
郡山市	正直古墳群	27号墳	6	1		19	24		
南相馬市	(曾森古墳)	?	7			3	5		勾玉1
郡山市	正直古墳群	23号墳	6					10	
郡山市	正直古墳群	30号墳	4			1	4	7	
双葉郡富岡町	小浜古墳群	2号墳	4			1	19	176	

第182図 福島県における主要古墳出土石製模造品

(6) 古墳出土石製品模造品の組成の特徴 (第182図)

稲村繁氏や寺沢知子氏らが指摘するように、古墳出土の石製模造品は刀子形を含むことが基本とされている(稲村1982、寺沢1990)。正直古墳群では、正直27号墳南箱式石棺の他に、23号墳そして30号墳という時期の異なる2基の古墳で刀子形の出土が確認されている。そのため正直古墳群内において、その首長墓的な位置にある古墳の副葬品は、刀子形を含むという基本原理が継続していたと考えられる。

一方では、正直27号墳北箱式棺東側区画や同西側区画のように刀子形を含まない組成も存在する。刀子形を含む南箱式石棺と、北箱式石棺の間に明確な時間差は存在しない可能性が高い。そして、ある程度の同時期性を前提にしたうえで、組成に差が見られるという点は、系譜や製作者の違いではなく、被葬者の位置付けの違いといったものを想定するほうがより理解しやすいのである。

南箱式石棺の被葬者をより首長的な階層と仮定した場合、北箱式石棺で刀子形が副葬されないものは階層的に下位の被葬者と想定できる。

石製模造品を対象とした場合、福島県内のほぼ同時期の古墳には、国見町塚野目11号墳や南相馬市真野49号墳などが挙げられる(第182図)。塚野目11号墳は埋葬施設から刀子・斧・鎌形の石製模造品が出土している。出土遺物の分析を行った中村五郎・渡部正俊氏によれば「国見八幡塚出現の伏線として」重要な意味合いを持つ古墳という位置付けが行われている(中村・渡部1984)。

真野古墳群は100基を越える古墳群で、古墳の埋葬施設は木棺直葬・礫棚・箱式石棺・竪穴式様石室・横穴式石室・横穴式石室といった様々な種類が見られる。真野49号墳は直径21mを測り、群内の5世紀代に築造されたものでは最大の円墳である。埋葬施設は礫棚で、刀子・斧・鎌・案・鏡形などの石製模造品が出土している。塚野目11号墳と真野49号墳の石製模造品は刀子形の形態的特徴などから、正直27号墳よりわずかに先行することが考えられる。両古墳は、現在まで知られる限り、それぞれの古墳群中で唯一石製模造品が出土している古墳で、いずれも古墳群造営の開始段階に近い時期の築造と考えられる。

正直27号墳や塚野目11号墳、真野49号墳は、いずれも豊富な石製模造品を副葬される点で共通する。そして、その被葬者は、階層的には埴輪樹立古墳の下位に位置付けられるものの、石製模造品という新たな祭祀の道具を導入する契機となった人物と考えられる。

(7) 石製模造品の形態と石材・付着物の相関関係

1. 正直27号墳の石製模造品 (第183図)

これまで、石製模造品各形式の主に形態についてその特徴をみてきた。第4章第4節において、石材の成分分析を行った。その際にも触れたが、各形式そして細別された分類は石材と相関関係にあることが分かる。右島和夫氏が鶴山古墳出土石製模造品の分析から、形態分類が石材の特徴に対応することを抽出したように(右島1986)、正直古墳群においても形態の相違が石材の相違と呼応していることが理解される。

正直27号墳は、2棺並列する3つの埋葬区画に4人以上の人物が埋葬されたと想定される。石製模造品についても、複数の形態、異なる石材が見られ、さらに白色物質の付着が観察され、形態・石材そして付着物という属性において、複雑な様相を呈している。しかし、それらは無関係ではなく、相互に関

連する状況であることが看取される。先ず、こうした観点をもとに概観する。

石製模造品に付着する白色物質は、正直 27 号墳にのみ確認される。この白色の物質については、由来は判明していないものの、分析の結果、「付着物は石材由来ではない」可能性が高い。また、石材は肉眼観察及び成分分析から、石材 A と石材 B の二者に分けられる。

南箱式石棺（第 183 図左）では、南 1 の斧形、南 2～7 の刀子形、南 27～33 の単孔円板、南 45～50 の双孔円板が石材 A で付着物は見られない。南 8～21 の剣形、南 22～26 の剣形、南 34～44 の単孔円板が石材 B にあたり、そのうち南 8～21 の剣形に白色付着物が明瞭に残る。

北箱式石棺東側区画（第 183 図右上）では、北東 7～12 の剣形、北東 37 の有孔円板が石材 A で、付着物は見られない。北東 1～6 と北東 13～23 の剣形、北東 24～36 の双孔円板が石材 B に該当し、このうち北東 1～6 の剣形と北東 24～36 の双孔円板に白色付着物が観察される。

北箱式石棺西側区画（第 183 図右下）では、北西 2～17・18 の剣形、北西 19～22 の単孔円板が石材 A となり、北西 1 の剣形、北西 23～27 の双孔円板が石材 B に該当する。そして、北西 18 の剣形を除く全てに白色付着物が確認される。

石製模造品は、製作段階から喪葬儀礼の段階、そして埋納へと至る各過程が想定される。出土した状態は埋納された最終段階の姿を反映していることは言うまでもない。これまで見てきたように、形態では剣形・有孔円板は埋葬施設の枠を越えた共通性が見られる。さらに、石材、白色付着物においても同様の状況を呈している。そのため、そのあり方は整理が必要であり、形態分類と石材、そして白色付着物の視点から、石製模造品が製作されてから石棺に埋納されるまでの流れを考えてみる。その際、共通する形態・石材のものはほぼ同一時に連続して製作されたと想定する。

なお、白色付着物についてはその由来も含め不明な点が多く、これまでのところ明らかな類例は知られていない。異なる状況ではあるが、等閑視することは重要な情報を見逃してしまうことにも繋がりがかねない。一方、その有無に依拠した立論には限界も感じるため、白色付着物を考慮しない場合と積極的に評価した場合の二通りの視点で考えてみる。

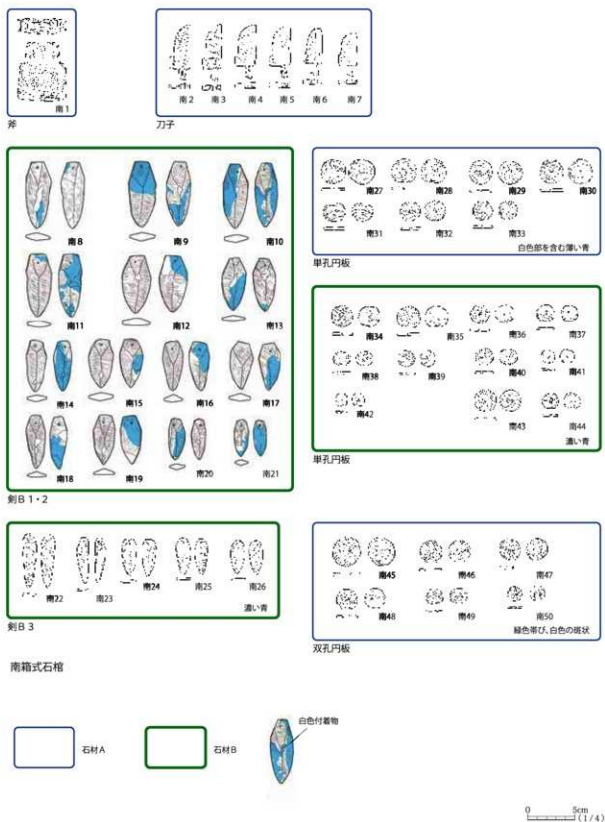
2. 形態と石材の相関関係からの立論（第 184 図）

先ず、白色付着物を考慮しない流れをみってみる。

正直 27 号墳全体の石製模造品は、石材 A と石材 B に大別される。これらのうち、石材 A に分類されるもののうち、南 1 の斧形、南 2～7 の刀子形、南 27～33 の単孔円板、南 45～50 の双孔円板は南箱式石棺に埋納される。北東 7～11・12 の剣形、北東 37 の双孔円板は北箱式石棺東側区画に埋納される。そして、北西 2～17・18 の剣形、北西 19～22 の単孔円板は、北箱式石棺西側区画に埋納されている (①)。

石材 B に分類される器種では、南 8～21、南 22～26 の剣形と南 34～44 の単孔円板が南箱式石棺に埋納される。北東 13～22・北東 1～6 の剣形、北東 24～36 の双孔円板が北箱式石棺東側区画に埋納される。そして、北西 1 の剣形と北西 23～27 の双孔円板が北箱式石棺西側区画に埋納される。基本的に同じ細別形式はばらばらになることはなく、まとまりとして同じ石棺・区画に埋納されている。

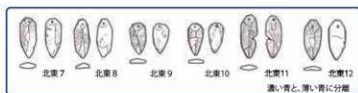
この中で最も特徴的なものが、②-1 とした南 8～21・北東 1～6・北西 1 の様相である。これらの剣形は、基部が台形を呈する酷似した形態で、石材は B、さらに白色付着物が見られる点で共通する。平面形態・石材という 2 つの属性で共通することから、これらが同一の工房で一括して製作されたこと



第183図 正直27号墳出土石製模造品一覧



則B 1・2

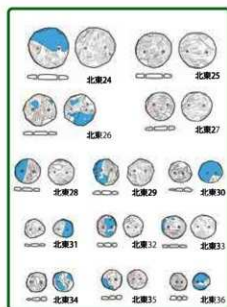


則B 1・2



則B 3

北箱式石棺東側区画



双孔円板



双孔円板



則B 1



則B 2



則C 2



単孔円板

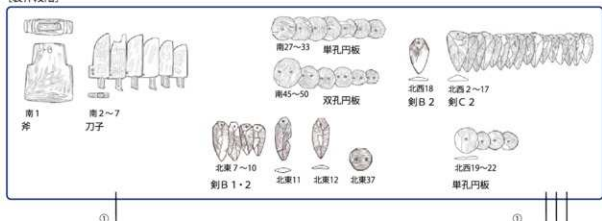


双孔円板

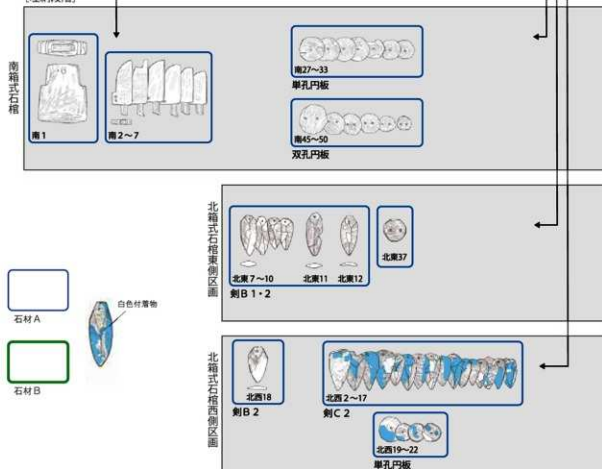
北箱式石棺西側区画

0 5cm
(1/4)

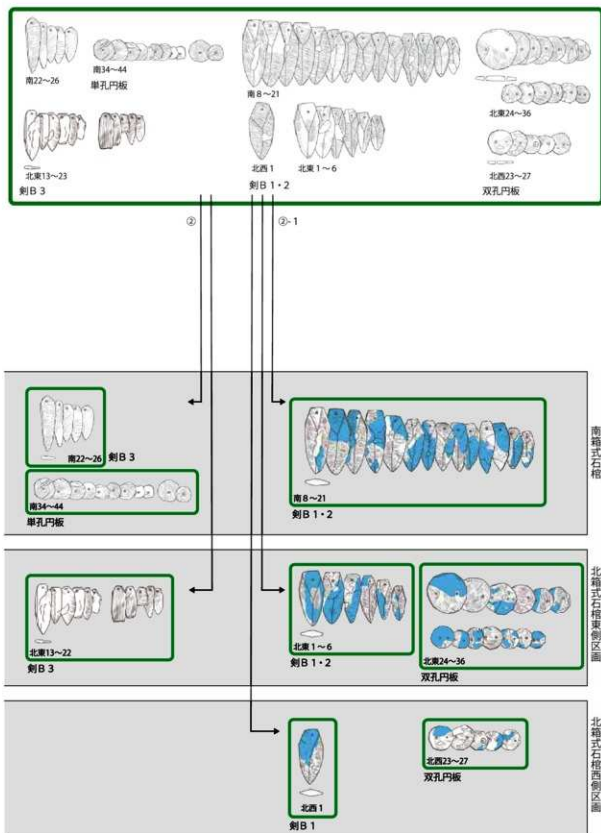
【製作段階】



【埋納段階】



第184図 正直27号墳石製模造品の動き



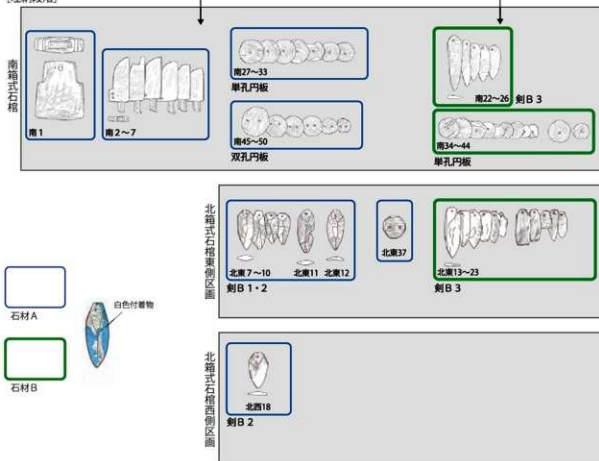
[製作段階]



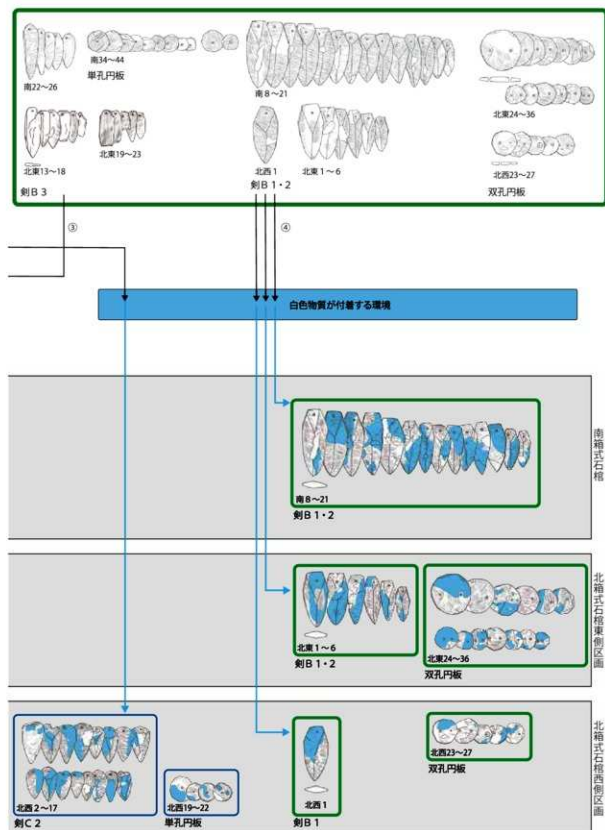
[喪葬段階]



[埋納段階]



第185図 正直27号墳石製模造品の動き(白色付着物を考慮しての検討)



が首肯される。これらが、それぞれ南箱式石棺、北箱式石棺東側区画、北箱式石棺西側区画で出土することから、埋納の段階で、3つの石棺に分けられた可能性が高い。

3. 形態と石材・付着物の相関関係からの立論（第185図）

第185図は、白色付着物の情報を加味して石製模造品の動きを整理したものである。

各箱式石棺には、付着物のあるものとなないものが混在することから、埋納後に何らかの影響を受けて白色物質が付着したのではないことが分かる。白色付着物はA・Bいずれの石材でも見られ、石材と関係がないことから、製作段階では付着していないことが分かる。そうした状況からは、製作段階と埋納段階の間に、白色物質が付着する段階を想定することが妥当と考えられる。

①は、石材Aのものが白色物質が付着することなく、各石棺に埋納される動きである。②は、石材Aのものに白色物質が付着し、その後、石棺に埋納されるものである。③は、石材Bのものが白色物質が付着することなく、各石棺に埋納される動きである。④は、石材Bのものに白色物質が付着し、その後、石棺に埋納されるものである。

この中で最も特徴的なものが、④に該当する剣形の南8～21・北東1～6・北西1である。この剣形は、基部が台形を呈する酷似した形態で、石材はB、そして白色物質が付着するという点で共通する。形態・石材という2つの属性で共通することから、これらが工房で一括して製作されたことが想定される。そして、いずれも白色物質が付着していることから、製作後も同じ環境に置かれ、石棺に埋納する段階で、2つの石棺・3つの埋葬区画に分けられたと考えられる。

一連の流れを製作段階・埋葬段階・埋納段階と仮定すると、石製模造品が本来のまとまりから逸脱する場面は、製作後から埋納直前のいずれかの段階と考えられる。製作後、白色物質が付着するまでに石材Aと石材Bが混在する。そして埋納直前に、あるものは形式毎のまとまりを有したまま、あるものはばらばらになり埋納されたものと思われる。

以上のように、白色付着物を考慮しない場合と、積極的に評価した場合の、二通りの解釈を行った。いずれにせよ、古墳に埋葬された人物の死に際し製作された石製模造品は、単純にそれぞれの箱式石棺に埋納されたのではないことは分かる。そこには、石製模造品が混在する場面、さらには白色物質が付着する場面が想定される。その時間は、埋葬に関する時間であり、短時間ながらそこにモガリの時間が想起される。

引用・参考文献

- 稲村 繁 1982『関東における古墳出土の滑石製模造品について』『國學院大學大学院文学研究科紀要』14 輯 國學院大學大学院 254-272 頁
- 河野一隆 1999「石製模造品の登場と埋葬儀礼の変容」『考古学ジャーナル』No.453 ニュー・サイエンス社 18-23 頁
- 河野一隆 2002「石製模造品」『考古資料大観』第9巻 小学館 331-340 頁
- 河野一隆 2003「石製模造品の編年と儀礼の展開」『研究報告』第11集 帝京大学山梨文化財研究所 15-27 頁
- 佐久間正明 2017『石製模造品から見た古墳時代の葬送と祭祀』 東北大学博士論文
- 篠原祐一 1996「剣形模造品の製作技法―下毛野地域を例にして―」『研究紀要』第4号 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1-20 頁
- 篠原祐一 1997「石製模造品剣形の研究」『祭祀考古学』創刊号 祭祀考古学会 25-47 頁

- 白石太一郎 1985「神まつりと古墳の祭祀－古墳出土の石製模造品を中心として－」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 国立歴史民俗博物館 79-114 頁
- 相山林蔵 1972「葬と祭の分化－石製模造遺物を中心として－」『國學院大學日本文化研究所紀要』第29輯 國學院大學日本文化研究所 1-39 頁
- 鈴木素行 1997「ニツ堂遺跡の剣形石製模造品－茨城県における剣形石製模造品の法量と形態を添えて－」『茨城県考古学協会誌』第9号 茨城県考古学協会 72-87 頁
- 清喜裕二 2013「③滑石製品」『古墳時代の考古学』4・副葬品の型式と編年 同成社 178-188 頁
- 田中新史 2002「伝常陸浮島出土の滑石製模造品」『土筆』第7号 土筆舎 472-483 頁
- 寺沢知子 1990「石製模造品の出現」『古代』第90号 早稲田大学考古学会 169-187 頁
- 中村五郎・渡部正俊 1984「国見町出土の石製模造品－塚野目11号墳出土例を中心として－」『福島考古』第25号 福島県考古学会 97-102 頁
- 右島和夫・石川正之助 1986「鶴山古墳出土遺物の基礎調査1」『群馬県立歴史博物館調査報告書』第2号 群馬県立歴史博物館 11-20 頁

第3節 斧形石製模造品

本節は、刀子形石製模造品とともに古墳副葬の主要品目である斧形を検討対象とした。斧形は袋部の整形を必要とし、刀子形に比べ製作に技巧を要したと考えられる。そのため、製作の特徴などを刀子形よりも明確に読み取れる可能性がある(佐久間 2012・2018)。

正直古墳群では、正直 27・9 号墳の 2 基の古墳から斧形が出土しており、その位置付けを考察する。

(1) 斧形石製模造品製作と工具の認識

1. 形態分類と工具痕 (第 186 図)

斧形の石製模造品は、中空の袋部を作り出す袋斧形と中実の短冊形が知られている。前者が通時的かつ主体的に出土し、さらに複雑な形態を呈すことから製作という点ではより多くの情報を内包していると考えられる。また、正直古墳群で出土しているのは袋斧形のため、袋斧形を検討対象とした。この袋斧形は第 186 図のように形態の特徴からいくつかの類型に分類が可能で、概ね a～f 型の 6 つに分類できる。

【a 型】袋部の基部から徐々に狭まりながら屈曲部へ移り、弯曲しながら肩部へ至る。そしてしだいに広がりながら刃先部へ至るもの。全体的に細身の形態を呈す。

【b 型】袋部の基部と屈曲部の幅はほぼ同様の値を示す。肩部と刃先部の幅も近似する値のものが多く、a 型に比べやや幅広となる。

【c 型】袋部の基部からわずかに広がり屈曲部へ移る。b 型以上に幅広となる。屈曲部から肩部への移行のしかたを見ると、なだらかに弯曲するものと、鋭角に屈曲するものがある。

【d 型】袋部が刃部に比較して小さく刃が片面に反っているもので、「手斧形」と言い換えられる特徴を持つもの。

【e 型】屈曲部と肩部が非常に小さく細長の長方形に近い形態のもの。

【f 型】屈曲が顕著でいわゆる「イカリ肩」の特徴を持つもの。

2. 紐通し孔の分類 (第 187 図)

斧形の袋部に穿たれる貫通孔は、模倣対象となる鉄斧には見られないもので、石製遺物として製作される際に新たに追加された属性である。しかし、そのあり方は一様ではなく、穿孔がないものも存在する。この穿孔は、一般に紐通し孔と考えられている。

第 187 図は、紐通し孔のあり方を整理し、類型化したものである。その際、紐通し孔の有無とともに袋部が中空か中実かという点が関係する。

【袋部有一無孔】は、紐通し孔が無く、袋部が中空である。【袋部有一片面貫通孔】は、紐通し孔が片面にのみ施され、袋部が中空のものである。基本は 1 孔だが、特殊な例として、片面に 2 孔が穿たれる事例がある。【袋部有一両面貫通孔】は、両側に紐通し孔が施され、袋部が中空のものである。【袋部無一无孔】は、紐通し孔が施されず、袋部が中実のものである。【袋部無一貫通孔】は、中実の袋部に紐通し孔が貫通するものである。【基部一表面貫通孔】としたものは、袋部が中実で基部から斜方向に紐通し



第186図 形態分類図及び部位名称



【袋部有一無孔】



【袋部有一片面貫通孔】



【袋部有一片面貫通孔】



【袋部無一貫通孔】

【袋部無一貫通孔】



【基部・表面貫通孔】

0 10cm (1/4)

第187図 紐通し孔分類図

孔が貫通するものである。中には基部と側面の両側から穿孔され、中空を意識したと思われる例もある。

(2) 製作工程復元と諸属性との相関関係

1. 表面の工具痕から設定した製作工程 (第188図)

斧形と刀子形の表面に残る工具痕を比較した場合、類似するものも多く、「工具痕」・「工具」は共通する部分が多い。【擦る】は道具を使い力をこめて対象物をこする、【磨く・研ぐ】は平滑にし光沢を出すためにこする、【削る】は少しずつ、薄くそぎとるというものである。

そして、石製の砥石による工具痕を「擦痕」、手法を「研磨」とした。また鉄製工具(刀子・ノミ状工具など)による工具痕を「削り痕」、手法を「削り」と規定した。

こうした概念を基本とし、石製模造品に残る「工具痕」と現在明らかになっている「工具」、「手法」について、整合性を考慮しながら検討を行う。

表面の工具痕は、擦痕が主体のものや削り痕が主体となるものなどに大別され、それらはその特徴から工具と手法の類推が可能である(第188図)。実際の資料から模式的に示した②～⑤に分類され、さらに①を想定することで製作工程を復元する際の理解を助けることになる。

- ①: 全面に粗い擦痕が残る。砥石による整形研磨。
- ②: 全面に粗い擦痕が残る。袋部と刃部の区別がなされる。砥石による整形研磨。
- ③: 擦痕が主体的なものを一括する。やや粗い擦痕の③aと、細かな擦痕の③bとに分けられる。③aは砥石による整形研磨と仕上げ研磨、③bは仕上げ研磨の可能性もある。部分的に削り痕も観察される。
- ④: 削り痕が主体となる。削りの及ばない袋部中央や縁辺部を中心に擦痕bが残る。鉄製工具による削り。
- ⑤: 全面に削り痕が残る。鉄製工具による削り。

擦痕と削り痕との関係については、剣崎天神山古墳1で顕著のように、「擦痕が生じた面を、鉄製工具で削り平滑にする」と前後関係が明らかで、精製から粗製への変遷が想定される。

対象遺物はいずれも完成品であり、こうした精粗の別が生じるのは精製に仕上げる工程を省略したことによると考えられる。そのため、上述した①～⑤の各分類は製作時の工程を反映している可能性が高く、「①→②→③→④→⑤」という変遷の図式で示される。

2. 形態との相関関係

先に工具痕の状況から①～⑤という分類を提示し、それが製作工程を反映するとの仮説を提示した。ここでは、①～⑤の各分類が、斧形の形態と対応関係にあるのか、あるいは年代的な差異を有するかを検討する。

平面形態との対応関係について、②では、多古台No.3-1号墳1・2はともに不定形で、形態分類のa～f類にあてはまらないが、刃部が幅広になるなどc類の特徴も見られる。なお②～③の剣崎長湊西古墳1はb・c類の特徴を持つ。③では、芳志戸十三塚古墳2・剣崎天神山古墳1・北椎尾天神塚古墳1・多古台No.3-6号墳2と鶴崎天神台古墳第2粘土槨1などほとんどがc類に該当する。そして、猫作・栗山16号墳1はb類の特徴を持ち、お富士山古墳1はf類に含まれる。④では、上赤塚1号墳2は全体に



第188図 工具痕からの工程復元図

幅広でc類に含まれ、一ノ分目古墳1や野毛大塚古墳第3主体部1はb類に当てはまる。多古台Na3-6号墳1は両者の特徴を持つが、袋部に比べ刃部が幅広になる点などからc類と考えられる。⑤では長者屋敷天王山古墳2・日下ヶ塚(常陸鏡塚)古墳2・片山1号墳3が典型的なa類を呈する。一ノ分目古墳2は、袋部の基部と屈曲部の幅が等しくb類の範疇に含まれる。

このように、②が不定形、③は形態c類、④はc・b類、⑤はa類という大まかな対応関係を指摘することが可能で、工具痕が平面形態と対応関係にあることが分かる。

3. 袋部穿孔方法 (第189図)

袋部の穿孔には他の形式で見られない製作方法が用いられ、穿孔部の相違から第189図上のように主な5つに分類できる。

【無孔】袋部に穿孔が施されないもの。鶴山古墳1や剣崎長瀬西古墳1がある。

【単孔】工具を回転させることにより棒状に穿孔が施される。工具の直径が孔の直径となる。多古台Na3-6号墳1・3、北の内古墳1があり、多古台Na3-6号墳4や北椎尾天神塚古墳1では若干の加工を伴う。

【周縁複数孔】工具を回転させることで周縁寄りに3か所以上の穿孔を施し、それを基にその内側を削るもの。野毛大塚古墳第3主体部3は袋部内底面に4か所の工具痕が残る。千人塚古墳1は周縁部に沿うように工具痕が残り、さらに底面中央部にも痕跡が見られる。

【単孔拡大】穿孔する目的の中央部を1か所穿孔し、それを基に周囲を削り拡大する。円形あるいはそれに近い形態となる。長者屋敷天王山古墳2・日下ヶ塚(常陸鏡塚)古墳1・片山1号墳6・万年寺つつじ山古墳1が顕著な例である。

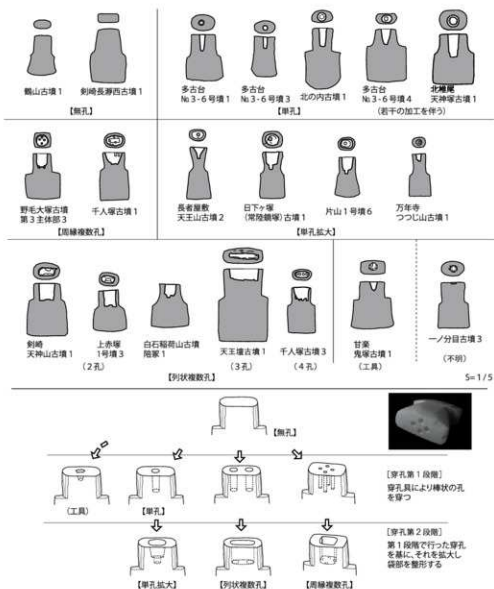
【列状複数孔】工具を回転させることで2・3か所に穿孔を施し、それを基にして周囲を削るもの。袋部内底面に工具痕を残し、確実にこの類型に該当するものには剣崎天神山古墳1・上赤塚1号墳3・白石稲荷山古墳陪冢1(以上2孔)、天王塚古墳1(3孔)、千人塚古墳3(4孔)がある。その他、真野49号墳1・正直27号墳1などもこの類型に該当する。

上述した各類型の穿孔に用いられた工具は、主にノミ状の鉄製工具が想定されるが、錐状あるいは棒状の鉄製工具が使用された可能性がある。

また、大多数の資料は上記の類型に分類可能だが、それに含まれないものも見られる。甘楽鬼塚古墳1は鋭利な工具による加工痕跡が見られるが、回転による穿孔の痕跡が見られず、異なる工具・手法の可能性もある。また、一ノ分目古墳1～3は、やはり周囲に鋭利な工具による工具痕が見られる。中央の孔はほぼ円形だが非常に浅いものである。

上述した工具痕からの分類は穿孔方法の相違を反映しており、第189図下のように整理できる。【無孔】は基部を平滑にした状態で、穿孔の準備段階となる。その平坦面から穿孔具により孔を穿つ〔穿孔第1段階〕へ移行する。この内、1孔を穿ったものはそれだけで完成形の【単孔】となる。第1段階で行った穿孔を基に、刀子やノミ等の鉄製工具で拡大し袋部を整形する〔穿孔第2段階〕へ至る。【単孔拡大】は中央に穿った1孔を拡大し、【列状複数孔】は並行に穿った2～4孔を拡大するもの、【周縁複数孔】は縁辺に沿って穿った小孔の内側を削り袋部に仕上げるものである。

①～⑤の各分類と袋部穿孔方法との関係について概観すると、②では無孔、③では単孔と列状複数孔



第189図 袋部穿孔分類及び穿孔方法

群	工具痕 (製作工程)	平面形態				袋部穿孔				
		a類	b類	c類	他	単孔拡大	周縁複数	列状複数	単孔	無孔
I群	⑤	●	●			●				
II群	④		●	●			●		●	
III a群	④・③			●				●		
III b群				●	●				●	
IV群	③・②				●					●

●:主体 ●:客体

第190図 各属性からの群設定

が主体を占め、⑤では単孔拡大にほぼ限定される。④では共通性が見られないものの、各分類と袋部穿孔には概ね関連性があると言える。

4. 斧形諸属性の相関関係から設定したまとまり (第190図)

①～⑤の各分類について、分類ごとの年代観を見ると、②は5世紀中～後、③は5世紀前～中でもやや中葉のものが多く、④は5世紀前～中、そして⑤が4世紀後～5世紀前となる。③と④で時間的に重なる部分も見られるが、概ね各類型は年代的差異を有していることが分かる。このように、各分類と年代観が連動し、両者が整合性を持つ関係にあると言える。

これまでの検討から、表面工具痕から設定した分類と、平面形態、年代、袋部穿孔方法の特徴が相関関係を持つことが明らかとなった。

ただ、これまでの検討は①～⑤に分類した工具痕に主眼を置き各属性と対比する方法を採ったため、一古墳から出土した複数の資料が異なる段階に該当する場合もあった。また、工具痕の遺存状態が良好でないものもあり、工具痕という属性を絶対的な指標にすることが難しいことも判明した。そのため、工具痕、平面形態、袋部穿孔方法を有意なまとまりとして再構築することが必要となり、「群」という上位概念を設け、次に示すⅠ～Ⅳ群を設定した (第190図)。

なお、製作工程の設定では、粗製から精製という段階設定で把握したが、各まとまりを再構築するにあたり、時間的に前出のものから順次枠組みを設定する。

【Ⅰ群】工具痕は最も精製の⑤が該当する。平面形がa類、袋部穿孔が単孔拡大の組み合わせを示すものの。

【Ⅱ群】工具痕は④を中心とする。平面形がb類を主体とするが、c類も含まれる。袋部穿孔は周縁複数孔や単孔などが見られる。

【Ⅲa群】工具痕は③を中心とし④も見られる。平面形はc類で、袋部穿孔方法は列状複数孔の特徴を備えた資料群である。

【Ⅲb群】工具痕は③を中心とし④も見られる。平面形はc類や不定形なものがあり一様でないが、袋部穿孔方法がいずれも単孔で共通する。

【Ⅳ群】工具痕は③・②を中心とする。平面形は不定形なものほとんどを占める。最大の特徴は扁平になり、袋部に穿孔が施されず無孔となる点である。

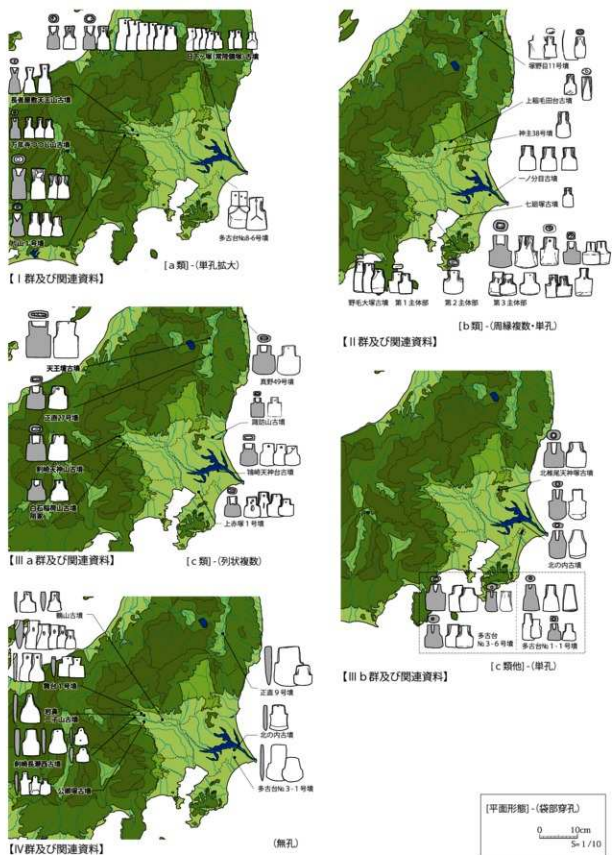
(3) 関東・東北地方における袋斧形石製模造品の展開

1. 斧形各群の分布と特質 (第191図)

前項までに、工具痕 (製作工程)・平面形態・袋部穿孔方法などが相互に関連することを明らかにするとともに、それらを群という上位概念を設定し再構築した。

Ⅰ群斧形は、東国における石製模造品出現段階の4世紀後半～5世紀初頭に現れる。形態のみならず製作技法にも共通性が見られる点が大きな特徴である。検出された中では群馬県に多く、同地ではこの他にも採集資料が知られており、石製模造品出現に群馬県の首長層が主導的な役割を果たしたと考えられる。

Ⅱ群は、形態的には共通性が見られるものの、袋部穿孔方法などの点ではⅠ群やⅢ群に比べ類似性は



第191図 関東・東北地方における斧形石製模造品の展開

低い。年代は5世紀初頭～前半に位置付けられる。前代に見られなかった東京都や栃木県・福島県で出土することから、分布域の拡大とも捉えられる。

Ⅲ a 群は、古墳の築造時期は、5世紀前葉～中葉を中心とする時期である。正直 27 号墳の斧形はこの段階に位置付けられる。前段階と大きく異なるのはその空間分布で、福島県の3古墳からも出土しており、分布域が大きく拡大していることが分かる。形態的特徴と袋部穿孔の製作方法という2つの要素で共通性が強く感じられる。資料に見られる強い類似性からは、製作段階での共通性を読み取ることが可能で、地域を越えた繋がりが見え隠れする。内陸部の事例は刃先部が直線的であるが、沿岸部の例は刃先部が湾曲するものが多く、地域的な特徴の可能性もある。

Ⅲ b 群は、古墳築造時期は5世紀中葉～5世紀末で、Ⅲ a 群あるいはⅣ群と時間的に重複する部分もある。千葉県・茨城県・古香取海周辺に分布することから、地域差を反映した可能性が高い。なおⅢ b 群は紐通し孔が施されない。袋部穿孔を有するいわゆる有袋で紐通し孔がないという特徴を持つものは、上述した古墳の他に、片山1号墳・一ノ分目古墳・高柳銚子塚古墳・鶴崎天神台第1号粘土槌・弁天古墳・多古台No.3-1号墳が挙げられる。ほとんどが千葉県に位置することから、紐通し孔がないという要素もこの地域の特徴であった可能性が高い。

Ⅳ群は、5世紀後半を中心とする時期である。正直 9 号墳の斧形はこの段階に位置付けられる。北の内古墳に見られるようにⅢ b 群と重複する部分もある。公卿塚古墳については詳細が不明だが、この段階の可能性はある。これらの資料は扁平化が顕著で、それに伴い袋部に穿孔を施さなくなる点で共通するなど、簡略化・形態化を指摘できる。なお5世紀後半の群馬県では、舞台1号墳のように厚手で穿孔を有するものや、鶴山古墳のように袋部穿孔は無孔だが厚手のものも見られ、他地域とは異なる様相も見られる。

2. 斧形を中心とした石製模造品の展開

斧形の諸要素を検討することから得られた結論が、石製模造品全体の展開を検討するうえで有効な指針となりえるか、最後に先学の考察に照らしながら展開過程を考える。

I 群は、4世紀後半が該当する。石製模造品という新たな祭祀の道具が導入される段階である。主要品目の1つである斧形の形態と製作技法に共通性が見られることから、製作者の交流・往来が想定され、新たな祭祀を導入する背景に首長層の連携がうかがえる。また、出現期の大きな特徴として、斧形が石製模造品各器種の中で最も多く出土する点が挙げられる。このことから、斧形が石製模造品副葬という行為の中で重要な意義を有していた可能性が高い。

II 群は、5世紀初頭頃に該当する。群馬県での斧形の顕著な例が見られないことが特徴的である。該期の群馬県では、白石稲荷山古墳で2つの埋葬施設からそれぞれ100点を超える刀子形が出土し、東国の古墳における「同種多量」の典型例とみられている。しかし、同古墳から斧形の出土が無く、その重要性が低下し刀子形と逆転した可能性もある。なお、他の地域では未だ斧形が相対的に多数を占める場合もある。

Ⅲ a 群は、5世紀前～中葉の展開期が該当する。この段階は、分布域が拡大する状況から石製模造品祭祀を受け入れる首長層の増加を想定するのが自然な解釈である。そして、製作面で強い共通性が見て取れる点も重要である。こうした広範囲におよぶ共通性が、果たして情報の伝達だけで生じるかは疑

間であり、製作工人の交流あるいは往来などを想定する必要があるだろう。さらに、石材の採取場所がある程度限定されることなども考慮すると、製作から副葬に至る過程が、単独の首長領域内で帰結することは困難である。そのため、複数の首長領域にまたがる移動が必要であり、首長どうしの繋がりが想定される。

Ⅲb群は、5世紀中葉～後半に該当する。千葉県・茨城県では地域に特徴的な製作方法の斧形も見られ、独自性が顕在化する。このことにより、群馬県や福島県などの内陸部と、千葉県と茨城県の沿岸部という、様相を異にする2つの地域が浮かび上がる。筆者はかつて、阿武隈川流域の主要遺跡の刀子形には群馬県の影響を色濃く受けるものがあるという点と、千葉県では地域に特徴的な刀子形が製作される点を指摘した(佐久間 2008・2009)。このように群馬県を中心とする地域と、千葉県を中心とする古香取海周辺地域とが、2つの地域として特徴付けられることは多くの分析結果が暗示している。

Ⅳ群は5世紀後半に該当する。石製模造品の副葬が減少する衰退期にあたり、斧形は簡略化され形骸化する様子が明らかとなる。こうした変化は、斧形に限らず刀子形など他の形式にも顕著に現れる。その変化の要因として製作者の交流・移動が希薄になることが想定される。だが、それは祭祀遺物としての重要性の低下を反映したものであることは想像に難くない。さらに、広域にわたった祭祀の衰退は首長間の関係をも変容させた可能性がある。

正直 27・9号墳の斧形は特徴的な属性を有しており、上述した各群を代表するものの一つとなる。東日本における斧形石製品の変遷を考えるうえで、欠かすことのできない資料であることが理解される。

引用・参考文献

- 稲村 繁 1982「関東における古墳出土の滑石製模造品について」『國學院大学大学院文学研究科紀要』第14輯 254-272頁
- 魚津知克 2005「鉄製農具の副葬と農具形石製祭器の副葬」『古代』第118号 早稲田大学考古学会 79-104頁
- 大岡由記子 2005「集落における玉作(近畿・畿内周辺部)」『古墳時代の滑石製品』 埋蔵文化財研究会 111-135頁
- 大賀克彦 2008「成塚向山1号墳出土の玉類～滑石製品の出現と生産に関する認識を中心に～」『成塚向山古墳群』 群馬県埋蔵文化財調査事業団 499-516頁
- 川上真紀子 1996「古墳出土の石製模造品と地域性」『考古学と遺跡の保護』 273-286頁
- 河野一隆 1999「石製模造品の登場と埋葬儀礼の変容」『考古学ジャーナル』No.453 ニュー・サイエンス社 18-23頁
- 河野一隆 2002「石製模造品」『考古資料大観』第9巻 小学館 331-340頁
- 北山峰生 2003「石製模造品生産・流通の一形態」『橿原考古学研究所論集』14 277-294頁
- 北山峰生 2005「古墳出土の石製模造品」『古墳時代の滑石製品』 157-180頁
- 北山峰生 2002「石製模造品副葬の動向とその意義」『古代学研究』第158号 古代学研究会 16-36頁
- 小林行雄 1959「石製品」・「石製模造品」『図解考古学辞典』 東京創元社 548-549頁
- 佐久間正明 2008「福島県阿武隈川流域における古墳出土石製模造品」『地域と文化の考古学』Ⅱ 明治大学考古学研究室 493-508頁

- 佐久間正明 2009「東国における石製模造品の展開—刀子形の製作を中心に—」『日本考古学』第27号 21-55頁
- 佐久間正明 2011「石製模造品にみる毛野の特質」『古墳時代毛野の実像』雄山閣 105-109頁
- 佐久間正明 2012「東国における古墳出土袋斧形石製模造品の製作方法と展開」『古代』第127号 早稲田大学考古学会 129-162頁
- 佐久間正明 2018「斧形石製模造品の一様相 特徴的な袋斧形石製模造品の分析を通して」『考古学研究』第65巻第1号 34-54頁
- 佐生 衛 2012「祭祀遺跡・祭祀遺物研究の方法論と展望」『祭祀儀礼と景観の考古学』國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター 33-46頁
- 渋谷興平 1978「鶴崎天神台古墳」『史像』No.5 1-12頁
- 篠原祐一 1996「剣形模造品の製作技法—下毛野地域を例にして—」『研究紀要』第4号 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1-20頁
- 白井久美子 1991「石製立花と石枕の出現」『古代探叢』Ⅲ 335-354頁
- 白石太一郎 1985「神まつりと古墳の祭祀—古墳出土の石製模造品を中心として—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 79-114頁
- 相山林継 1972「葬と祭の分化—石製模造遺物を中心として—」『国学院大学日本文化研究所紀要』第29輯 1-39頁
- 杉山晋作 1985「石製刀子とその使途」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 115-133頁
- 杉山秀宏 2017「群馬県内古墳・祭祀跡出土鉄製農具について—金井東裏遺跡出土鉄製農具検討のための基礎作業—」『研究紀要』35 群馬県埋蔵文化財調査事業団 61-80頁
- 清喜祐二 1994「古墳出土農具形石製模造品の研究」『文化財学論集』713-722頁
- 清喜祐二 1998「初期農具形石製模造品の基礎的研究—大形石製刀子を中心として—」『古代』第105号 早稲田大学考古学会 75-100頁
- 田中大輔 2007「古墳出土石製模造品の拡散に関する試論」『東京考古』第25号 63-89頁
- 寺沢知子 1986「祭祀の変化と民衆」『季刊考古学』第16号 雄山閣 56-61頁
- 寺沢知子 1990「石製模造品の出現」『古代』第90号 早稲田大学考古学会 169-187頁
- 寺村光晴 1966『古代玉作の研究』吉川弘文館
- 外山和夫 1978「石製模造品類を出土した高崎市剣崎天神山古墳をめぐる」『考古学雑誌』第62巻第2号 31-53頁
- 中井正幸 1993「古墳出土の石製祭器—滑石製農具を中心として—」『考古学雑誌』第79巻第2号 31-61頁
- 中井正幸 2006年「石山古墳の石製祭器とその意義」『喜谷美宣先生古稀記念論集』175-184頁
- 中川敬太 2004「農具形石製模造品の展開に関する一試論」『金鈴』第23号 早稲田大学考古学研究会 75-99頁
- 野島 永 1995「古墳時代の有肩鉄斧をめぐる」『考古学研究』第41巻第4号 53-57頁
- 原田享二・戸村勝司朗 2002「多古台遺跡群No.3地点1号墳出土の遺物について」『多古台遺跡群Ⅱ—No.3地点の調査—』香取郡文化財センター 53-67頁
- 深澤敦仁 2001「群馬県の石製品・石製模造品製作所について」『考古聚英』梅澤重昭先生退官記念論文集 231-245頁

- 深澤敦仁 2003「石製模造品の生産流通に関する素描 ―群馬県の事例からのアプローチ」『同志社大学考古学シリーズⅧ』 377-388 頁
- 深澤敦仁 2005「原石の流通と玉作（関東）」『古墳時代の滑石製品』 埋蔵文化財研究会 53-65 頁
- 北條芳隆 1999「古墳時代前期の石製品研究をめぐって」『考古学ジャーナル』No.153 ニュー・サイエンス社 2-5 頁
- 北條芳隆 2002「総説 玉と石製品、骨角器」『考古資料大観』9 41-44 頁
- 右島和夫・徳田誠志 1998「東国における石製模造品出土古墳 ―高崎一号墳の基礎調査から―」『高崎市史研究』第9号 1-36 頁

第4節 白玉

(1) 正直古墳群出土の滑石製白玉

1. 白玉の分類に関する先行研究

白玉の観察をするうえで、情報量が多く欠かせない視点は何なのか、先行研究を概観する。白玉についての総合的な視点から研究を行ったものでは、篠原祐一氏の業績が挙げられる。氏は、寺村光晴氏や相山林継氏の先行研究を踏まえ、製作工程を復元し、白玉の分類基準として「側面（胴）の形状」・「側面研磨状態（擦痕）」・「孔面研磨状態（擦痕）」・「穿孔方法」という諸属性を挙げる。さらに、それらの技術的水準の難易度から編年試案を示した。氏の編年は、白玉の各属性の型式学的な変化を総合的に捉えたものである。そして側面の形状について、「A（算盤玉状）→B（甕玉状）→C（白玉状）→D（管玉状）→E（平玉状）」と変化するとした（篠原 1995）。氏の白玉の製作に関する認識は、白玉を検討する際に基本的な指針を提供するものとなっている。

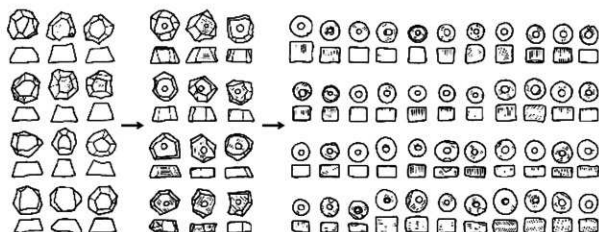
こうした通時的で総合的な検討の他、時間的に限定された古墳の発掘調査報告などでは、より細かな観察視点からの分類もなされている。例えば野毛大塚古墳第1主体部出土遺物に対する尾見真起子氏の分析では、出土地点のまとまりや規格の・形態的特徴に加え、石材・穿孔・整形研磨などの視点から分析を行う（尾見 1999）。また清喜裕二氏は津堂城山古墳の考察において、同じ形態でも擦痕の特徴の違いが生じる点を見出し、その相違が仕上げ工程の貫徹の度合いに起因すると指摘する（清喜 2013）。長坂聖天塚古墳の遺物を分析する中沢良一氏は、形状分類、穿孔軸と上下面の関係、穿孔技法、終孔部細分を分類基準とする。そして、側面の形態分類については、同じ算盤玉形であっても、稜の位置が胴部中央にあるのか、あるいは片側に寄るのかなど、より細かな分類がなされている（中沢 2016）。

2. 正直古墳群出土白玉の特徴（第192～194図）

白玉の特徴を考えるに際し、正直古墳群と隣接する正直A遺跡の工房から出土した白玉のあり方を参考にする。正直古墳群の母体となった集落には、正直A遺跡と正直B遺跡の2つの遺跡が知られる。正直B遺跡は前述したように5世紀前半の遺跡と考えられるのに対し、正直A遺跡は面的な調査により5世紀後半を中心とする集落であることが確認され、同時期の遺構として竪穴建物跡 57 棟・祭祀遺構 3 基・粘土採掘坑などが調査されている。

正直A遺跡では石製模造品工房と考えられる住居は、12号・18号・52a号住居の3棟が検出されている。このうち12号住居は6.3×5.6mの長方形を呈し、滑石の破片や原石が床面のほぼ全面で検出された。素材剥片を原石から剥離する際や、素材剥片を剥離して石製模造品の祖形を成形する際に生じたものが多いようである。そして、剣形・有孔円板などとともに白玉製作の過程を示す資料が多数出土している（第192図）。

白玉製作の工程については、寺村氏が玉作の工程を「荒割→形割→側面打製→研磨→仕上げ」と復元し、滑石の白玉は「材質の軟かいためと小形のために」各工程を判別することが難しいとする（寺村 1966）。篠原氏は寺村氏の製作工程が硬質石材を前提としたもので、軟質石材の対象物に対してより実態に即し



第192図 正直A12号住居出土遺物



正直27号墳北箱式石棺西側区画



正直27号墳北箱式石棺東側区画



正直27号墳墳丘外土器棺



正直23号墳木炭椁

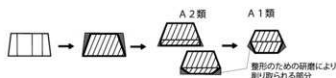


正直30号墳第1埋葬施設



小浜2号墳

第193図 福島県における古墳出土の白玉



第194図 正直27号墳出土白玉の製作工程模式図

た呼称を提示し、「採集・搬入原石確保→荒削Ⅰ→荒削Ⅱ→形削→切削・側面荒研磨→穿孔→仕上げ研磨→完成」と工程を復元している（篠原 1995）。

正直A遺跡 12 号住居では、荒削や形削での工程品があり、切削・側面荒研磨段階のもの、穿孔がなされたもの、そして完成品といった各工程のものがある。製品の大多数は円筒形で側面の擦痕が縦～斜方向のものである。これに混じって少数であるが横方向の擦痕のものがある。また、擦痕が両端部からなされ、中央部がわずかに膨らみ太鼓胴を呈するものが少量見られる。12 号住居の年代は土器や石製模造品から TK23・47 と考えられる。

次に、正直古墳群出土の白玉を概観する（第 193 図）。正直 27 号墳北箱式石棺では、東側区画から 673 点、西側区画から 783 点出土した。同墳墳丘外土器棺からは 61 点が出土した。23 号墳木炭槨からは 10 点出土した。遺存状態は良くないが、中位に稜線が見られるもののもの含まれる。30 号墳第 1 埋葬施設からは 7 点出土した。いずれも中位に稜線を持つものは少なく台形に近い。また、富岡町小浜 2 号墳からも白玉が 176 点出土した。このうち、30 号墳第 1 埋葬施設は、石製模造品の年代は TK23・47 頃と考えられ、正直A遺跡 12 号住居に近い時期にあたる。両者の白玉は、大きさ・特徴を等しくする。

正直 27 号墳に副葬された白玉を製作する際、製作者がイメージした完成形は A 1 類の算盤玉形である。そして、稜線が片側に寄った A 2 類は A 1 類へ至る過程にあることが理解される。こうした製品の特徴を基に製作工程を復元すると（第 194 図）、先ず大まかな形を整え穿孔を行った後、整形のための研磨を行う。その際、一度台形状に整えた後、今度は台形の幅広となった面の端部から徐々に研磨を行う。そして半分まで研磨することにより、中央に稜線が形成されることになる。なお、福島県の白玉は、いずれも擦痕が明瞭な点も特徴と言える。

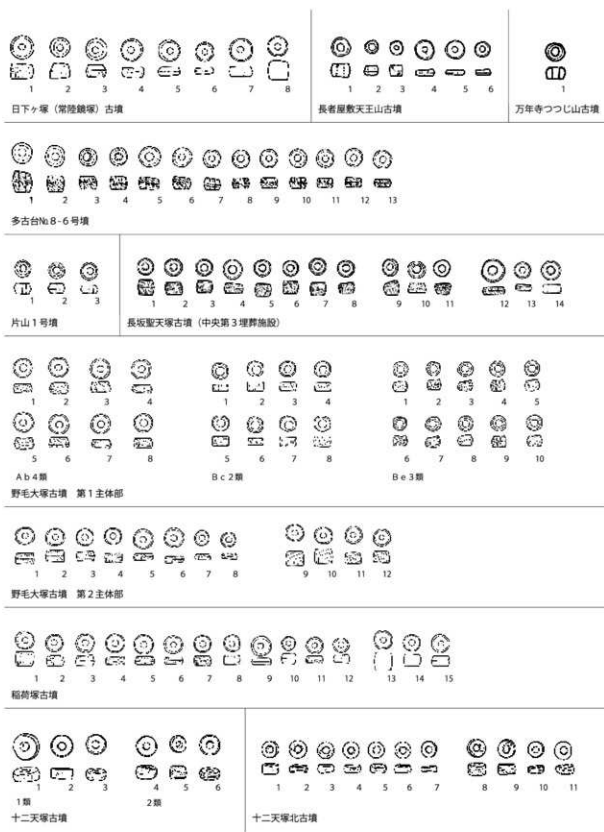
（2）正直古墳群における白玉の導入過程（第 195・196 図、表 14）

東北地方の 5 世紀代の石製模造品工房では、正直 27 号墳と同形態の白玉を製作した痕跡は見られず、在地の資料から白玉の位置付けを把握することは難しい。そのため関東地方の類例を概観し、27 号墳出土資料の時間的位置付けを検討する。なお、対象とするのは刀子形や斧形などの石製模造品が伴し、先行研究により年代の検討が比較的多くなされているものとした。

4 世紀代の古墳には、日下ヶ塚（常陸鏡塚）古墳・長者屋敷天王山古墳・多古台 Na 8-6 号墳・片山 1 号墳があり、白玉の側面中央に稜線を持ち、稜線はシャープで精巧なつくりのものが多い（第 195 図）。光沢を持つものも多く、それらの多くは擦痕が不明瞭であることから仕上げには整形の研磨と異なる研磨がなされていた可能性もある。

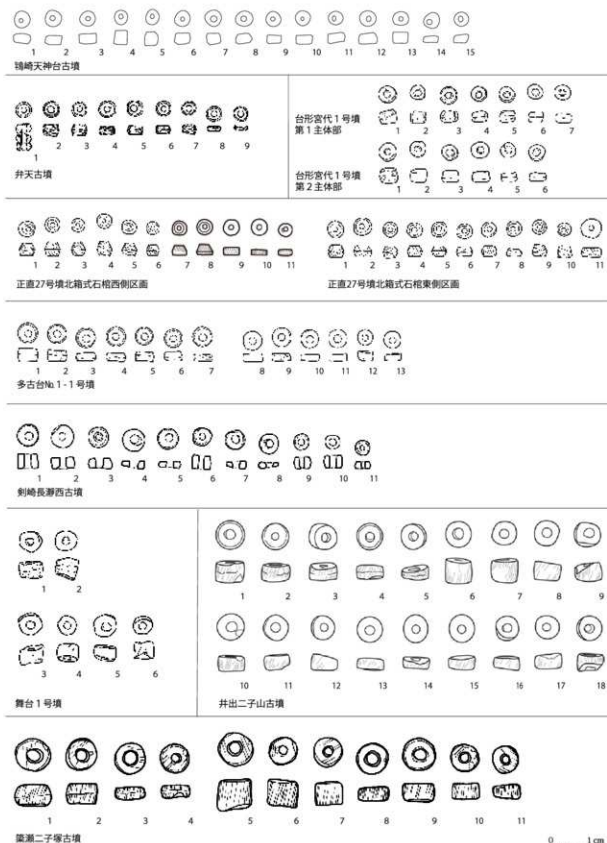
5 世紀に入ると、長坂聖天塚古墳や野毛大塚古墳・稲荷塚古墳・十二天塚古墳のように、算盤玉形を主体としながら、太鼓胴などの形態も含まれるようになる。また、稜線が中央にあるものに加え、稜線が片側によるものが見られるようになる。こうした形態の白玉は、5 世紀中葉の弁天古墳・猫作栗山 16 号墳・多古台 Na 3-6 号墳でも一定量見られる。そして稜線を形成する場合でもしだいに稜線は弱いものが増え、一方で円柱状を呈するものも目立つようになる。

5 世紀中～後葉にかけては、多古台 Na 3-1 号墳でほぼ 7 割の白玉が稜線を有するものの、明瞭なものは少ないとされ、大戸宮作 1 号墳では稜線を持つものが 486 個で、稜線を持たないものが 558 個となる。



第195図 関東・東北地方における古墳出土の白玉（1）

0 1 cm
(1/1)



第196図 関東・東北地方における古墳出土の白玉（2）

表14 関東地方主要古墳出土白玉の特徴

古墳	出土遺構	数	形態的特徴	法量(径と厚さ)
日下ヶ塚古墳 (茨城県大洗町)	粘土層	3989	銅板の欠けたものや、銅板に一段落をのけて平たく両端面から外周を斜に磨り上げたもの	厚さ15.0mm・3.0mm・2.0mmなど様々、径は1.5～3.0mm程度
長倉屋敷天王山古墳 (群馬県高崎市)	主体部か?	296	いずれも表裏面・側面に面磨を施す	
多古台№8-6号墳 (千葉県多古町)	主体部	2509	全て側面のほぼ中央に線をもち、側面を二分する。側面には磨削の跡に生じた縦もしくは斜方向の擦痕がみられるが、線を境として、上と下では擦痕の方向がわずかに異なる	径は5.2～3.6mmの幅であるが、4.5～3.9mmが多い。厚さは5.3～1.6mmの幅で、3.5～2.5mmが多い
片山1号墳 (群馬県高崎市)	粘土層		断面形は算盤玉状を呈し、中央にシャープな稜がある。作りは精巧	径4.6～4.15mm、厚さ2.7～1.9mm
長坂聖天塚古墳 (埼玉県児玉町)	第2埋葬施設 第3埋葬施設	252 293	銅板中央に線を有する算盤形のAが主体で、長径気味のBや扁平気味のCがある。また、わずかに太鼓胴のDが含まれる	第2埋葬施設は、径は平均4.6mm、厚さは平均2.6mm。第3埋葬施設は、径は平均4.6mm、厚さは平均2.8mm
野毛大塚古墳 (東京都世田谷区)	第1主体部 第2主体部	2461 25	I＝中央が角張った算盤玉型。稜が非常に明瞭。 II＝中央が張り出した太鼓胴。稜は明瞭で一直線。 III＝ゆるい弧を描き込んだ円柱状。稜は不明瞭。 IV＝直線的で円柱状が全くない	最大径は、A径が5.2～5.0mmに集中、B径が4.5～3.9mmに集中、C径が3.4～3.1mmに集中
磯崎天神台古墳 (千葉県鎌倉市)	第2粘土層	148	2点が側面の磨削研ぎが上から下まで不分割	最大径は3.0～5.1mmで、3.6～4.1mmの範囲のものが多い
十二天塚古墳 (群馬県南州市)	礎石?	51	1類は断面は方形を呈す(12個)。2類は断面は算盤玉形を呈す(39個)。片面穿孔で全面が研磨	1類は径6.0～4.2mm、厚さ4.2～1.1mm、2類は径7.0～4.2mm、厚さ3.0～1.9mm
石神2号墳 (千葉県千葉市)	主体部	1854	扁平な円筒状で、中位でふくらみ、稜をもつものが過半数を占める。ただし張り出しはさほど強くなく、算盤玉に近いような極端なものは認められない。中位でふくらみは全点に共通する	径は2.9mmが最小で、最大は4.85mmあり、4.0～3.5mm程度のものが多い。厚さは最小1.05mm、最大1.4mmと幅があるが、2.0mm台が最も多い
弁天堂古墳 (千葉県柏市)	木棺直葬	25	整形は上方・下方の2方向から行われたと考えられる。稜は殆どが側面のほぼ中心に存在するが、なかには片寄るものがある	
御作・栗山16号墳 (千葉県成田市)	主体部及び 墓室覆土	2529	側面に磨らぬ稜を持つA、側面に磨らぬ稜を持たないB、側面に磨らぬ円柱状を呈するC、片方の径が著しく小さく台形状を呈するDの4種類	計測値は平均値で、Aが径3.87mm・厚さ2.51mm、Bが径3.75mm・厚さ2.67mm、Cが径3.92mm・厚さ2.55mm、Dが径3.88mm・厚さ3.00mm
多古台№3-6号墳 (千葉県多古町)	第1主体部 第2主体部 第3主体部 第4主体部	52 318 887 18	第2主体部は、側面中央に線をもちそろばん玉の形状に近いものA、側面に太鼓胴に磨らぬものB、側面に磨らぬ稜がみられ円柱状のものC、一方の面の径が小さく断面形が台形状を呈するものDと分類。AタイプとBタイプの区別が明瞭でないものも多く含まれる	径5.0～3.8mm、厚さ3.8～1.7mm 径6.0～3.7mm、厚さ3.6～1.4mm 径8.2～3.3mm、厚さ6.1～0.8mm 径5.2～3.6mm、厚さ3.6～1.8mm
多古台№3-1号墳 (千葉県多古町)	木棺直葬	2006	側面に稜の有るものと無いもの、ほぼ7割に線を認められるが、明瞭なものはない。稜は側面を二分するように中央にあるもの、一方に片寄るもの	径は5.0～4.0mmの間に集中する。厚さは15.0～1.0mmとばらつきが大きい
大戸宮作1号墳 (千葉県香取市)	木棺直葬	1044	側面に磨らぬ稜をもつAタイプが486個、稜をもたないBタイプが558個	A・Bそれぞれの平均値で、径が4.47mm・4.48mm、厚さが12.59mm・2.56mm
台形宮代1号墳 (千葉県成田市)	第1主体部 第2主体部	63 152	側面にわずかな稜をもつ、中腰のみのタイプが主流	径4.1～3.1mm、厚さ3.1～1.1mm 径5.0～3.4mm、厚さ3.6～1.2mm
多古台№1-1号墳 (千葉県多古町)	木棺直葬	1152	算盤玉様の稜を持つもの、台形を呈するもの、長い筒形のもの、径が大きく厚みのないもの	径5.0～4.0mm程度のものも多数あり、穿孔は1.5～1.0mm
舞台1号墳 (群馬県前橋市)	造出埋納施設	202	断面はきれいな平行線を示すものから、傾斜するものまで多様	径5.0mm(82個)、4.5mm(58個)、5.5mm(48個)にほぼ集中
北の内古墳 (千葉県神崎町)	2号埋葬施設	102	側面に明瞭な稜をもつものはなく、ややふくらみがあるものが少数。大半は側面が直線的。側面の研磨の痕跡はやや右へ傾く	
井出二子山古墳 (群馬県高崎市)	埋葬施設	39	短い円筒状。側面は孔に平行して縦方向に研磨	厚50.6～0.3cm、直径0.7～0.55cm
築港二子塚古墳 (群馬県安中市)	横穴式石室 小森谷家蔵	119 968		径19.2～6.0mm、厚さは7.1～1.7mm

※各報告書より径、長さ、厚さ、高さで表現されているが、本稿では「厚さ」に統一

古墳ごとにその割合は異なるものの、明瞭な稜線を持つものは少なくなる。

5世紀末～6世紀初頭にかけては側面に稜線を持つものは非常に少なくなり、北の内古墳や井手二子山古墳などで顕著のように側面が直線的で短い円筒状を呈するものが主体となる。ただ、稜線を有するものが完全に消失するのではなく、築瀬二子塚古墳のようにわずかに残存するようである。なお、縦方向の擦痕が顕著になることも特徴の1つと言える。

関東地方における白玉の変遷を概観すると、まず「算盤玉形の消失」という特徴が挙げられる。なお、算盤玉形も太鼓胴を呈する形態も、両端部から整形研磨を行う点で共通し、太鼓胴のものが算盤玉形の「稜の不明瞭化」と関連することがうかがえる。また、研磨による擦痕の特徴は、横方向のものは非常に少なく、両端部から研磨される斜方向の擦痕が大半を占める。そして稜線を持つ白玉の減少とともに縦方向の擦痕が顕著になり、「両端部の斜方向から、縦方向一直線への擦痕の変化」と指摘できる。さらに大きさについて、直径は井手二子山古墳が5.5～7.0mm、築瀬二子塚古墳が6.0～9.2mmと、それまでの白玉に比べ大きくなっていることが分かる。そのため「小型から大型化」という点も時期的な特徴と言えるかも知れない。

さらに「精製から粗製へ」という点も指摘できる。これは、出現当初の白玉は光沢があるものや擦痕が目立たないものが多いためである。この事象に関しては、清喜裕二氏が津堂城山古墳の白玉を検討した際に明確に述べる。それによると側面に残る擦痕の特徴から、a.側面全体に残るもの→b.部分的に残るもの(上下の端面付近の場合が多い)→c.十分に研磨されて擦痕を残さないもの、という順で仕上げ工程が貫徹された個体になると指摘した(清喜 2013)。擦痕は石材や砥石の違いにより現れ方も異なるが、表面の平滑さは整形を目的とした研磨の後に最後の仕上げ研磨を行ったことに起因すると考えられる。

上記したこれらの特徴は相互に関連するものであり、白玉が一定の方向性を持って変遷したと想定される。変化の内容から、その方向性は省略化・省力化を意図すると考えるのが最も理解しやすい。

では、正直 27 号墳から出土した白玉はどの段階に位置付けられるだろうか。その特徴は、稜線がシャープではないものの算盤玉状を呈し、稜線が片側に寄るものが含まれる点である。また中央の稜線を意識しながらも、稜線が弱く太鼓状に近い形態を呈するものも含まれることが挙げられる。そして、側面の擦痕は明瞭で光沢などは生じない。こうした特徴を有する白玉は、5世紀中葉でもそれほど新しくない段階と想定される。

引用・参考文献

- 市川創・島崎久恵 2005「畿内における集落出土の滑石製品」『古墳時代の滑石製品』埋蔵文化財研究会 195-217 頁
- 尾見真起子 1999「「5」石製白玉」『野毛大塚古墳』世田谷区教育委員会 171-178 頁
- 佐久間正明 2020「福島県郡山市正直 27 号墳の出土遺物—滑石製白玉とガラス小玉を中心に—」『考古学雑誌』第 102 巻第 2 号 日本考古学会 51-72 頁
- 篠原祐一 1995「白玉研究私論」『研究紀要』第 3 号 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 17-49 頁
- 志村 哲 1989「十二天塚古墳の築造年代について」『群馬県史研究』29 号 群馬県史編纂委員会 1-24 頁

- 清喜裕二 2013「津堂城山古墳出土の玉・石製品・石製模造品」『津堂城山古墳』 藤井寺市教育委員会 302-316 頁
- 寺村光晴 1966『古代玉作の研究』 吉川弘文館
- 中沢良一 2016「石製白玉」『長坂聖天塚古墳』 埼玉県美里町教育委員会 47・48 頁
- 原田享二・戸村勝司朗 1994「多古台遺跡群No.3 地点1 号墳出土の遺物について」『事業報告Ⅲ—平成4年度—』
香取郡市文化財センター 36-54 頁
- 原田享二・戸村勝司朗 2002「多古台遺跡群No.3 地点1 号墳出土の遺物について」『多古台遺跡群Ⅱ』 香取郡市文化財センター 53-67 頁
- 深澤敦仁 2005「原石の流通と玉作（関東）」『古墳時代の滑石製品』 埋蔵文化財研究会 53-65 頁
- 石島和夫・徳田誠志 1998「東国における石製模造品出土古墳—高崎一号墳の基礎調査から—」『高崎市史研究』第
9号 高崎市史編纂委員会 1-36 頁

報告書等

- 安中市教育委員会 2003『築瀬二子塚古墳・築瀬首塚古墳』
- 香取郡市文化財センター 1994「多古台遺跡群No.3 地点1 号墳出土の遺物について」『事業報告』Ⅲ
- 香取郡市文化財センター 1995『猫作・栗山16 号墳』
- 香取郡市文化財センター 2002『多古台遺跡群Ⅱ—No.3 地点の調査—』
- 香取郡市文化財センター 2003『多古台遺跡群Ⅲ—No.8 地点の古墳・No.9 地点の調査—』
- 香取郡市文化財センター 2005『北の内古墳』
- 群馬県教育委員会 1991「舞台1 号墳」『舞台・西大室丸山—平成2 年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告書—』
- 國學院大學 1956『常陸鏡塚』國學院大學考古学研究報告第1 冊
- 佐原市教育委員会 1988「大戸宮作1 号墳」「鶴崎天神台古墳」『佐原市内遺跡群発掘調査概報』Ⅱ
- 世田谷区教育委員会 1999『野毛大塚古墳』
- 高崎市 1999「剣崎長瀬西古墳」「長者屋敷天王山古墳」『新編 高崎市史』資料編1・原始古代1
- 高崎市教育委員会 2009『井出二子山古墳』
- 千葉県文化財センター 1977「石神2 号墳」『東寺山石神遺跡』
- 千葉県文化財センター 1982『千葉東南部ニュータウン13—上赤塚1 号墳・狐塚古墳群—』
- 千葉市史編纂委員会 1976「七廻塚古墳」『千葉市史』史料編1
- 日本文化財研究所 1976『多古台遺跡群調査概報』
- 福島県教育委員会 1994『正直A 遺跡 母畑地区遺跡発掘調査報告』34
- 弁天古墳発掘調査団 1993『柏市史調査研究報告Ⅲ—弁天古墳発掘調査報告書—』
- 本庄市教育委員会 2006「万年寺つつじ山古墳」『旭・小島古墳群』
- 美里町教育委員会 2016『長坂聖天塚古墳』
- 吉井町教育委員会 2004「片山1 号墳」『片山遺跡群』

第5節 鹿角製刀剣装具と鉄鏃

(1) 東北地方の鹿角製刀剣装具 (第197図)

東北地方における鹿角製刀剣装具の出土例について、ほぼ同時期で概要のうかがえる資料は正直 27 号墳以外に 3 つの出土事例が知られている。

山王遺跡は宮城県多賀城市にある。SX 230 遺物包含層より多量の遺物とともに、鹿角製の把縁装具が出土した。把縁装具と把縁突起を一体で作り出すもので、直弧文は施されない。土器は高坏と小型壺を主体とする組成で 5 世紀前半の年代観が与えられる。報文によれば直弧文の浮彫が施されるものと、されないものの間に「精粗や格式などの違いがあった可能性もある」とされている。さらに「実際に使用される集落内で製作された可能性」が指摘されている (宮城県教育委員会 1994)。

経の塚古墳は宮城県名取市に所在する。直径 36m の円墳で長持形石棺から鹿角製刀剣装具を付した直刀 2 点が出土した。鹿角製刀剣装具は把縁装具と把縁突起が別作りのものである。伊藤玄三氏は「良好な直弧文を認め得る経の塚古墳の鹿角製刀装具は、その点からも畿内から伝えられたものである可能性がある」とする。なお、その年代については古墳全体の特徴から 5 世紀中葉を想定している (伊藤 1970・1973)。

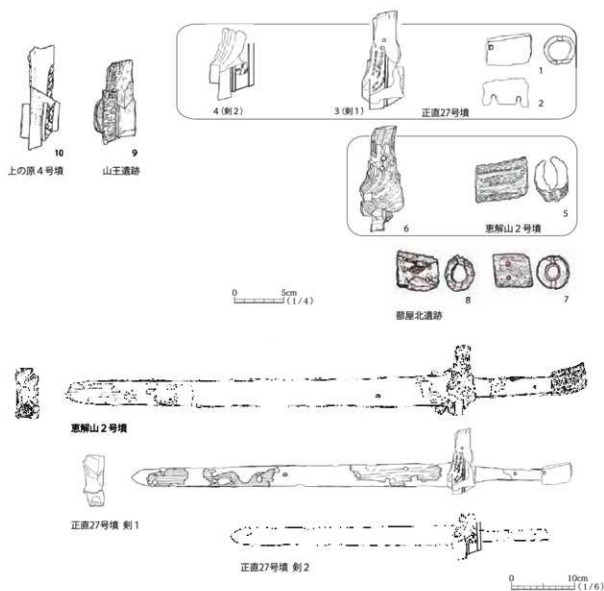
上の原 4 号墳は福島県浪江町に所在する。1953 (昭和 28) 年、開墾の際に発見された直径 15m 程の円墳で、埋葬施設である箱式石棺は内部が赤彩されていたという。鹿角製刀剣装具は、別作りの把縁装具と把縁突起、鞘口装具と、無文・小型の把縁突起があり、刀か劔かは明らかでない。遺物の詳細な観察を行った伊藤氏は、鹿角製刀剣装具が地方の古墳から出土する背景に、「畿内中央政権との結びつき」を読み取っている (伊藤 1973)。

ほぼ同時期と考えられる東北地方の鹿角製刀剣装具の対比においては、把縁装具の特徴として、把縁装具と把縁突起が一体になり直弧文が施されないもの (正直 27 号墳剣 1・山王遺跡) と、把縁装具と把縁突起が別作りとなり直弧文が施されるもの (経の塚古墳・上の原 4 号墳) とに大別される。こうした相違は、階層差や時期差、あるいは系譜の違いなど、様々な要因が考えられる。ただ、希少な遺物だけに、これまでは直弧文の有無からの優劣、それを基にした近畿地方中央部との関係が論じられるにとどまっていた印象は否めない。

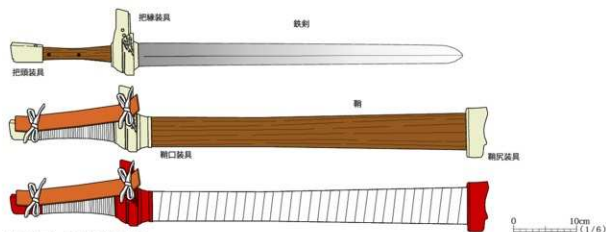
(2) 鹿角製刀剣装具研究における位置付け (第197図)

正直 27 号墳の鹿角製刀剣装具の位置付けを今日的な研究動向の中で捉えるために、類似する資料を概観する。最も特徴的な把縁装具 (第197図 3) については、把縁装具と把縁突起を一体で作り出し突出部の形状など全体的な特徴の良く似ているものが、徳島県徳島市恵解山 2 号墳から出土している (井上・山田 2013)。正直 27 号墳の把頭装具は、円筒形で直弧文を施さず、2 孔あるいは 4 孔を穿つもので、これと同形態のものがやはり恵解山 2 号墳で出土している。また大阪府四条畷市薮屋北遺跡では 2 孔のものと 4 孔のものが知られ、その他福井県永平寺町二本松山古墳などにも類例がある。

鹿角製刀剣装具の研究における現段階の到達点と考えられるものに、山田俊輔氏による研究が挙げら



第197図 鹿角製刀剣装具の類例



第198図 鹿角装剣の復元

れる(山田 2016)。氏は鹿角製刀剣装具が型式学的検討が十分になされていない現状を踏まえ、型式学的分析を行いその歴史的意義に迫ろうとした。把頭装具・把縁装具・鞘尻装具についてそれぞれを分類し、その組み合わせと直弧文も検討素材とする。そして、それらのあり方からA・B・Cという3つの系列を設定した。正直 27 号墳出土例と関連する恵解山2号墳から出土した資料はB系列の最古式にあたり、「B系列はTK73 型式期頃に出現していると考えられる」とする。そしてB系列の中でも「直弧文を刻み、定型化した」ものはTK216・TK208 型式期に位置付けられるとした。

山田氏の研究成果を援用すると、正直 27 号墳の把縁装具(3)は、把頭装具と把縁装具の組み合わせが不明ながら、恵解山2号墳例との共通点が指摘できる数少ない例の1つと言える¹⁾。なお把縁装具(4)は直弧文を有するものの、わずかに残存するのみで位置付けは難しいという問題も残る。こうした点を踏まえつつ最大公約的に捉えたと、正直 27 号墳の鹿角製刀剣装具はTK73～216 型式期の段階に位置付けるのが妥当と思われる。

(3) 正直古墳群出土鉄鑑の位置付け

1. 正直 27 号墳出土鉄鑑の類例(第199図)

東北地方では、正直 27 号墳とほぼ同時期の古墳から鉄鑑が出土した事例がいくつか知られている。また周辺集落の出土遺物を含め、その特徴について考える。

仏坊 12 号墳は福島県須賀川市にある直径 15m の円墳で、墳丘外箱式石棺から鉄剣 2 点・鉄斧 1 点・刀子 1 点とともに、鉄鑑が 2 点出土した(第199図 13・14)。鉄鑑は短い茎を持ち鑑身部は長三角形を呈し、全長はいずれも 4.0 cm を測る(須賀川市教育委員会 1998)。古墳の築造年代は5世紀前～中葉と想定される。

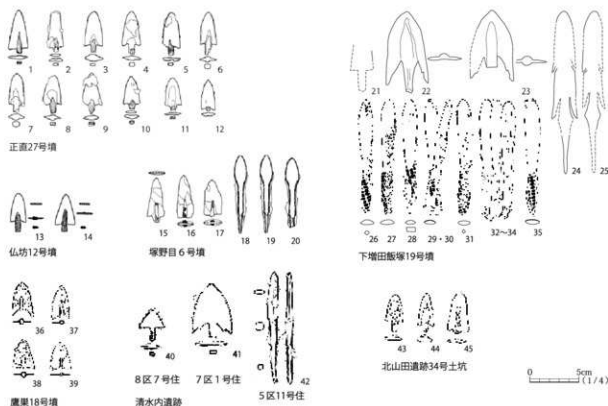
塚野目 6 号墳は福島県桑折町にある。前方後円墳あるいは2基の円墳の可能性があり、墳形・規模ともに不明である。無茎鑑 7 点・短頭鑑 7 点が出土しており(15～20)、このうち短頭鑑は緩やかな断面三角形形状のものと扁平なものがある(桑折町教育委員会 1989、大栗・草野 2015)。

下増田飯塚 19 号墳は宮城県名取市にある直径 7.2～7.5m の円墳で、埋葬施設の棺外から鉄鑑が多数出土した。短茎鑑は、鑑身部が三角形を呈するもの(21)、二重の逆刺を持ち三角形となるもの(22・23)がある。有茎鑑では、二段逆刺の腸袂柳葉鑑が 2 点(24・25)、鑑身部がゆるやかに茎部に至る柳葉鑑が 10 点(26～35)である。報文によれば鉄鑑の年代は5世紀中葉頃とされている(名取市教育委員会 2012)。

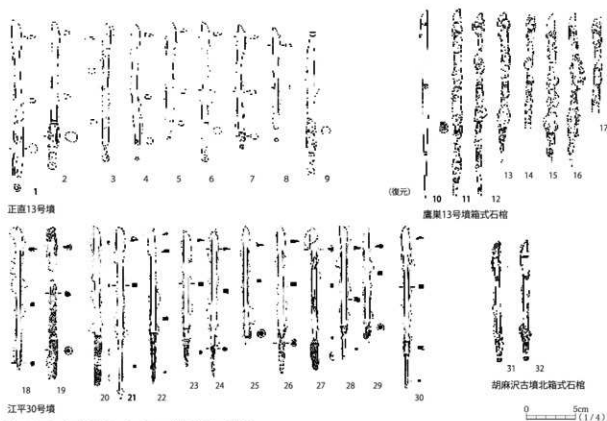
鷹巣 18 号墳は、宮城県白石市にある直径 22m の円墳である。埋葬施設は箱式石棺で、棺外から鉄鑑が 4 点出土した(36～39)。鑑身部は長三角形を呈し、弱い逆刺となる。中央部に矢柄を挿入するための中空の膨らみが確認される(白石市教育委員会 1972)。正直 27 号墳と同じ郡山市内の5世紀前半の集落である清水内遺跡でも、鑑身部が三角形の短茎鑑(40)、二重逆刺で三角形の短茎鑑(41)、鑑身部が剣身形を呈す短頭鑑(42)が出土している。

北山田遺跡 34 号土坑は、郡山市に所在する。集落は丘陵の平坦面に営まれ、土坑は斜面に位置し、その規模は長軸 265・短軸 118 cm を測る。鉄鑑は短い茎を持ち鑑身部は長三角形を呈し、3 点出土した(43～45)。共伴する土器から5世紀前半の年代が与えられる(郡山市教育委員会 1988)。

鉄鑑の分類・編年を総合的にに行い、その後に続く研究の道筋を示した杉山秀宏氏は、鉄鑑様式の展開



第199図 東北地方における5世紀前葉～中葉頃の鉄鍔



第200図 東北地方における5世紀後葉の鉄鍔

を論じるに際し、鉄鐙のセット関係を重視する(杉山 1988)。全国における長三角形を呈する短茎鐙の出土例を概観すると、短頭鐙あるいは柳葉系などの鉄鐙と共に出土することが分かる。東北地方における鉄鐙をセットという観点で把握すると、下増田飯塚 19 号墳では4種類 15本の鉄鐙が出土し、塚野目 6 号墳でも2種類の形態の鉄鐙が出土している。検出事例は少ないながら、東北地方においても複数の形態の鉄鐙がセットで副葬されることがうかがえる。

こうした事例に対し正直 27 号墳では、鐵身部が長三角形の短茎鐙のみまとまって出土している点が特徴的である。全国的には短茎鐙が短頭鐙や柳葉系などの鉄鐙と共にセットを構成する中で、他の形態の鉄鐙を含まないという点での特殊性を指摘できよう²⁾。東北地方の類例を検討すると、その特殊性とは、地域的な要因に拠るものではなく、さらに古墳の規模に明確な差は認められないことから階層差とも考え難い。そのため、現段階では正直 27 号墳に埋葬された人物の特殊性を反映するものと捉えておきたい。

2. 正直 13 号墳出土鉄鐙の類例 (第 200 図)

正直 13 号墳からは、片刃の長頭鐙が出土している(第 200 図 1～9)。ほぼ同時期の東北地方の古墳から出土した類例をみてみる。

鷹巣 13 号墳は、宮城県白石市にある直径 16m の円墳である。木棺直葬と箱式石棺が検出され、中心埋葬と考えられる木棺直葬から 25 本、箱式石棺から 1 本の鉄鐙が出土した(10～17)。最長のものは 18.5 cm で、復元の全長は 20 cm を超える(白石市教育委員会 1967)。

江平 30 号墳は、玉川村にある直径 3.8m の小規模な円墳で、木棺直葬と思われる埋葬施設から長頭鐙が出土した(18～30)。このうち 30 は、両刃で逆刺が大きく反る。古墳の築造時期は、報文によれば 5 世紀後葉～6 世紀前葉とされる(福島県教育委員会 2002)。

胡麻沢古墳は、棚倉町にある円墳で、墳丘は既に失われていたが、2 基の箱式石棺が検出された。南北に並列する箱式石棺のうち、南棺から片刃鐙の鉄鐙 10 点が出土した(棚倉町教育委員会 1982)。

東北地方南部における片刃の長頭鐙の類例は、5 世紀後半～6 世紀前葉の時期と考えられる。正直 13 号墳は、出土した土器・石製模造品の年代から 5 世紀後半と考えられ、鉄鐙の年代観とも一致する。

註

- 1) 正直 27 号墳の鹿角製刀剣装具について、これまで山田俊輔氏より多くのご教示を得た(2017 年 7 月 18 日・2024 年 8 月 4 日)。27 号墳の鹿角製刀剣装具は「2 点とも B 系列の古式に属するものと理解してよい」という位置付けとともに、恵解山 2 号墳と類似する点をご教示頂いた。そして、B・C 系列は系列内での斉一性があり特定工房で集中的に生産された可能性があることから、同じような工房が想定され、一元的に配布された可能性を指摘する。また、27 号墳の把縁装具(3)は、鋒ノ塚の直前に位置付けられるとした。なお、正直 27 号墳出土の把縁装具(4)にかろうじて見られる直弧文について、福岡高上山古墳・宮崎大萩 3 号地下式横穴など在地模倣生産の可能性のある資料の存在を指摘されたうえで、「定型化した直弧文を刻む前の資料に位置付けうる可能性と在地模倣生産品の可能性の双方を考えておく必要がある」とのご指導を賜った。
- 2) 正直 27 号墳の鉄鐙について、杉山秀宏氏より、正直 27 号墳の鉄鐙について「時期的には、5 世紀前半を中心とする時期にあるが、5 世紀後半代でも少し見られるもので、年代的に絞り込むのは少し難しい」との教示を得た。

また、「短茎鐵が他の、柳葉系や短頸系の鐵を全く交えずに副葬されることは、かなり珍しい」とご教示を賜った(2017年8月4日)。

また、箕浦尚氏より「弥生時代以来、無・短茎鐵を2〜4点だけ副葬する例や、10点以上の無・短茎鐵と倍以上の有頭鐵を組み合わせて副葬する例はあるが、同一型式の短茎鐵のみを10点以上まとめて副葬する例は珍しい」との指摘を得た。さらに「いわゆる大型品だったり、二重脇拵などの装飾性の高い型式ではなく、言ってしまうばスタンダードな短茎鐵が10点以上まとめられているという点も興味深い。5世紀代もある程度は在地生産だと思うので、こういった短茎鐵を生産する工房が近くにあったのか検討を要する」と課題を示された(2024年12月6日)。なお、村上恭通氏(愛媛大学)が来郡された際、遺物を見て頂いたことがある。その際、氏から「茎のある鐵だが茎は短く、全国的にも類例は多くない。そのため、在地産の可能性はある」とのご教示を得た(2006年1月28日)。

引用・参考文献

- 伊藤玄三 1970「東北」『新版考古学講座 第5巻 原史文化<下>』雄山閣 162-180頁
- 伊藤玄三 1973「福島県上の原4号墳の鹿角製刀装具」『福島考古』第14号 福島県考古学会 74-83頁
- 井上一樹 2010『鹿角製刀剣装具』立命館大学考古学資料集 第3冊 立命館大学考古学論集刊行会
- 井上洋一・山田俊輔編 2013『骨角器集成2』東京国立博物館
- 大栗行貴・草野潤平 2015「陸奥・出羽の古墳編年」『地域編年から考える一部分から全体へ』東北・関東前方後円墳研究会 119-137頁
- 佐久間正明 2018「福島県郡山市正直27号墳の出土遺物―鹿角製刀剣装具と鉄鍔を中心に―」『考古学雑誌』第100巻第1号 日本考古学会 51-67頁
- 杉山秀宏 1988「古墳時代の鉄鍔について」『樞原考古学研究論集』8 奈良県立樞原考古学研究所 1-116頁
- 杉山秀宏 2003「古墳時代の鉄鍔」『考古資料大観7 弥生古墳時代 鉄金銅製品』小学館 183-186頁
- 鈴木一有 2003「中期古墳における副葬鐵の特質」『研究報告』第11集 帝京大学山梨文化財研究所 49-70頁
- 平林大樹 2021「根柢みを用いた後期・終末期古墳副葬矢の構造」『文化財と技術』第10号 126-139頁
- 水野敏典 2003「古墳時代中期における日韓鉄鍔の一致性」『研究報告』第11集 帝京大学山梨文化財研究所 71-80頁
- 水野敏典 2013「1 金属製品の型式学的研究 ⑤鉄鍔」『古墳時代の考古学』4 同成社 63-71頁
- 山田俊輔 2013「東京国立博物館所蔵の鹿角製刀剣装具」『骨角器集成2』東京国立博物館 87-91頁
- 山田俊輔 2016「鹿角製刀剣装具の系列」『日本考古学』第42号 日本考古学協会 21-34頁

報告書等

- 大阪府教育委員会 2009『部屋北遺跡Ⅰ』
- 桑折町教育委員会 1989「塚野目6号墳」『林泉寺前遺跡・塚野目古墳発掘調査報告書』
- 郡山市教育委員会 1977「正直11・12・13号墳」
- 郡山市教育委員会 1988「北山田遺跡」『郡山東部』8
- 郡山市教育委員会 1997「清水内遺跡―5区調査報告―」/1999a「清水内遺跡―7区調査報告―」/1999b「清

水内遺跡—6・8・9区調査報告—第1冊』

白石市教育委員会 1967『鷹の巣古墳群（第1号-第13号）緊急発掘調査報告書』

白石市教育委員会 1972『鷹巣古墳群発掘調査概報』

須賀川市教育委員会 1998『仏坊古墳群』

棚倉町教育委員会 1982「胡麻沢古墳の発掘」『棚倉町史 第1巻』

徳島県教育委員会 1966『眉山周辺の古墳—恵解山古墳群 節句山古墳群—』

名取市教育委員会 2012『町裏遺跡・鶴巻前遺跡・下増田飯塚古墳群他』

福島県教育委員会 2002『江平遺跡』

福島県立博物館 1994『会津大塚山古墳の時代』

宮城県教育委員会 1994『山王遺跡Ⅰ 古墳時代中期遺物包含層編』